

## これからの計画系教育はどうあるべきか 計画系教育の変革のビジョン

日 時：2002 年 8 月 3 日（土） 13:15～17:00  
会 場：金沢工業大学 17 号館 401 教室  
司 会：服部 岑生（千葉大学・建築計画委員長）  
副 司 会：岡崎 甚幸（京都大学）  
記 録：吉村 英祐（大阪大学）  
パネラー：建築設計 伊東 豊雄（建築家）  
          建築計画 柏原 士郎（大阪大学）  
          都市計画 北原 理雄（千葉大学）  
          農村計画 重村 力（神戸大学）  
          歴史意匠 羽生 修二（東海大学）

### 研究協議会発言記録

#### 【服部岑生】

今日のパネラーの皆さんに席についていただきましたが、司会は服部、副司会は岡崎先生で進めさせていただきます。このパネラーのメンバーは3者の3委員会の共催ということで、基本的には委員会から推薦された3名の方、すなわち建築計画委員会からは柏原先生、それから農村計画委員会からは重村先生、都市計画委員会からは北原先生、そういう3名の方がまず共催の委員会からでております。それから計画系というと歴史意匠という分野という重要な分野があるんで、歴史意匠の先生として羽生先生というメンバーになっております。

計画系教育ということになると、基本的に設計計画、JABEE の用語を使うと設計計画ということになっていますが、その設計計画という職能といいますが、ものに非常に深く関わっているわけで、最近、その設計の中ではですね、際立って提案的であり、新しい考えの設計をされている伊東さんに来ていただいて、設計からの話題を提供していただくように考えております。

主題の解説を引き続いて岡崎先生にお願いしたいと思いますが、ほぼ2時間近く今から講演に入ります。休憩させていただいて伊東さんのお話を伺い、ディスカッションをさせていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

皆さんのお手元には資料集（注1）の中に質疑書が入っていると思いますが、休憩時間に回収させていただきますので、もし質疑がありましたらよろしくお願いたします。

#### 【岡崎甚幸】

ただいま紹介いただきました京都大学の岡崎でございます。趣旨をお手元の資料に簡単なものが書いてございますが、ほぼそれと同じ内容で、もう少し詳しく説明させていただきたいと思います。

ここで計画系といいますが、先ほど司会のほうから説明がございましたように、建築の設計・建築の計画、都市計画、そして農村、歴史意匠、こういう分野を総括して「計画」とここでは呼ぶことにいたします。そして、われわれがこれからこのシンポジウムで計画系教育のビジョンを明らかにするためのたたき台として、以下の四つの視点をここに挙げさせていただいております。

それはまず JABEE の問題であり、UIA の問題でございます。日本は何事も黒船が来ないと動かないという話もありますけれども、やはり今回も似たような状況でありまして、外からそういう問題が起って

きて、現在のような状況に至っていると思われま

それから2番目は、わが国の計画系教育の特徴、非常に違ったような状況、皆さんご存知のような状況にあるわけですが、これを一応分析して、これに対してどういう問題があるかということをお返したいと思

それから3番目は21世紀になって、さまざまな違った状況が起こって、社会的に起こってきておりますが、そういうものの中で、一体どういうふうにしたらいいのか。

で、4番目にその社会の要求に対して、職能として卒業生たちが、あるいはその職能教育をわれわれがどう

まず、最初の教育評価の国際化の問題でありますけれども、皆さんご存知のように世界建築家連合、UIA というものがござ

で、この中には研究という要素はないというわけでありま

そうすると、最近にわかに動き始めた JABEE というのは非常に大きな比重を持ってくるわけでありま

JABEE の中は皆さんご存知のとおり、四つの柱がござ

で、そのときに四つのうちの一つの柱の中で、設計教育だけなのか、あるいはその他の分野の歴史も含

時間がなくなってきましたので、後は簡単にさせていただきたいと思いますが、2番目のわが国の計画系教育の特徴と言いますのは、全体としてホーリスティック(holistic)という言葉で言われておりますが、構造の関係も含めたものである、ということですね。設計教育というのは、学生たちは非常に熱心にやっている。で、私たちの学校では構造の授業、環境の授業もほとんど出ずにやっている、というすごいものいると。作品は非常にいいのを作っているんだけど、体制としては非常に少ない設計の時間である。表向きに認められるコマ数、単位数は非常に少ないという。それから先生方は研究をしている方が非常に多い。論文を書いておられる方が多い。そうすると、設計教育がおざなりになっているんじゃないか、というこの指摘もほとんど当たっているんじゃないかと思えます。で、また一方、その先生方がお書きになっている論文というのは、外国の建築家の人たちにはほとんど知られていない。英文も書かれているものも少ないですし、彼らは最近その内容について少しずつ理解はし始めてはおりますけれども、ほとんど外国の建築家との交流はないということでございます。

3番目に、建築計画の教育をとりまく環境と言うのは、現在、地球環境問題であるとか、ストックの時代であるとか、あるいは目標を設定してそれにコツコツとやっていく、その計画手法、その基礎的な手法がもうあわなくなっているんじゃないかというふうに言われております。そして、アメリカも設計を教えるだけではなくて、もう少し広い知識を学生たちに与えたいという新しい変化も、アメリカを始め少しずつ起こってきているんじゃないかと思えます。われわれは、大学というものが一体、大学には工学あるいは理学あるいは文科系の学部がありますが、そういうところとわれわれ一緒に研究をしているわけでございます。あるいは設計においても、多少なく彼らと関わりがあるわけでございます。大学をどのように位置づけるかということも、大切ではないかと思えます。

そして4番目に、その職能としてわれわれが十分な教育をしているかどうか、あるいは学生が一級建築士をとって、十分な職能を果たしているかどうか。おそらくNO、あまりいい答えは出てこないんじゃないかと思えます。それは現在の混乱した街の様子を見ていますと、非常に他の先進諸国に比べて劣っているんじゃないかと思えます。これは皆さんが認めるところだと思います。とすると、どうも十分職能を果たされていない。で、例えば多くの法学部の大学院におけるロースクールの構想があります。で、司法試験があまりにも歪な状況になっているので、大学の教育をその司法の資格の認定に与える。そして司法試験を簡単にする。こういう改革がロースクールでは行われておりますが、やはり何らかの職能の教育を、この建築の分野においても行わなければいけないんじゃないかということ強く感じるわけです。そして、一方、UIAは建築家教育でありますけれども日本の場合、膨大な数の、160も170もの建築の大学があります。この中のほんのわずかしが建築家にはなっていないわけでございます。そうすると、残りの非常に広い分野の教育もこのJABEEの「設計・計画」の中で考えていかなければならないんじゃないかというふうに思っております。

非常に駆け足でご説明いたしましたけれども、以上の課題を今日これから皆さんと一緒に考えたいと思えます。よろしくお願い致します。

#### 【服部岑生】

ありがとうございます。

それではここから、講演をそれぞれのお立場からいただきたいと思います。皆さんお気づきになっておられませんかと思いますが、われわれの椅子がとても痛い椅子なものですから、講師の先生方にこれからずっとこの形で座っていただくとうたいへんなんで、お話される方を残して、普通の椅子のほうに座っていただきますが、よろしいですね？

それでは、順番に柏原先生からお願いいたします。

それから、皆さん資料をお求めいただいたと思えますが、資料は趣旨説明から順番に、パネラーの先生方のご意見のレジュメ、それから会場にたくさんの方来ていただいておられますが、その会場の皆さんの

中で、ここに論考していただいたものがいくつかあります。それからこちらのほうに、先ほど JABEE とか UIA の話が出てまいりましたが、そういう資料、それから全国の皆さんに大学にアンケートさせていただきましても、そのアンケートの十分なまとまりになっておりませんが、要点が書いてあります。講師の先生のお話を伺いながら、参考にさせていただきたいと思います。それでは、よろしくお願ひいたします。

【柏原士郎】

ご紹介いただきました大阪大学の柏原でございます。

私の役割は、建築計画の立場で説明するというところでございます。少し座らせていただきます。

その前に、資料 12 ページ、13 ページに私の趣旨がございますので、見ながらだいたいこの内容でご説明いたしますので、見ていただきたいんですが、訂正がございます。13 ページのところにも図がありますけれども、その図のタイトルが手違いで文字化けというか文章化けしております、正しいのは「日本型の建築教育システム案」ということで、私が提案させていただく日本型の建築教育システム案ということで、上の「教育計画とサブプログラム」というのを消していただきたいと思います。サブプログラムという言葉は絶対に使いたくないということを思っておりましたのが、いつの間にかこういうことになっておりましたので、是非真っ黒に塗っていただきたいというふうに思います。

それでは、本題に入らせていただきますけれども、その前に私は建築計画の立場で、どちらかと言えば、主催者の問題意識をベースにして話をするわけですが、実は建築計画の中にもいろんな立場がございます、先生方それぞれのご意見がございます。あくまでもこれは私個人の意見で、建築計画の委員会とか、そういう組織全体の意見ではないと言うことをまずお断りいたします。それと、やはりこのテーマは建築計画とデザイン教育というものの関係を如何に考えるかということが、メインの主題だと思います。そういうことを考えますと、どうしても今日の講師の伊東先生が何を考えておられるかということが私はたいへん気になりますので、伊東先生が何を考えておられるかということをまず読ませていただきました。それで、できたら伊東先生の考え方は間違っているんだ、というふうに言いたいなあ、と思って読んだわけでありまして、たいへん優れた方でありまして、私も基本的には賛同しております。何の反論もないと言いますと嘘になりますが、賛同しております。ただ一点、建築計画というものに対する認識は私とまったく違います。というのは、どういうことかということ、先生は非常に狭く考えておられる。で、私は建築計画というのは、基本的には建築の価値を考える学問であるというふうに思っております。何がいい建築か、ということを絶えず考えなかったら建築計画というものは成り立たないんですね。ですから、例えば寸法を決めるとか、何かそういうものを決めるとかいうことの場合ですね、出てきた結果が問題というよりもなぜそうなったか、どのようにして考えるかということが大事で、このようなことを考える分野はおそらく建築学の中でも、おそらく建築計画がいちばんそれに密着していると思いますね。ということを考えますと、伊東先生は少し建築計画は最適値を求める学問だというふうにおっしゃっていますけれども、最適値はどのようなタイムスパンの中で最適と言いますか、適正なもの考えるかという視点から考えますと、必ずしも現時点での最適値がいちばんいいというわけではない。ある意味では 10 年先、20 年先、ずっと先に最適値と言いますか、あるいい状態になっていくということがいいんだ、ということも考えるという、そういう価値観を考えるというのが建築計画である。ということで、その辺りの認識は少し考えを変えていただきたいなあ、というふうに思っております。あとでまた伊東先生からご意見があると思いますが、一応、そういうことを思っております。

それで、あのもう一点、JABEE とか UIA とか岡崎先生から話ございましたが、私はこのことについては、当然関心を持たなければならぬんだけど、持ちたくないという立場にあります。そういうことで、他の先生とは少し私は立場が違って、計画委員会の中からだんだん出て行かないといけないんじゃないかな、というふうな感じもしますが、またそれはなぜかということは後ほど順番に説明いたします。

それで、私のこのメモは七つの項目があります。

一つは、教育の評価は難しい。これは当たり前ですけれども、簡単に「教育、教育」と言ってほしくないわけですね。それと、これまでの計画系教育は間違っていたか？ これがいちばん大事だと思います。私は結論的には間違っていなかった、というふうに言いたい。3番目はそれではなぜ変革か？ 今日のタイトルにも「変革」という言葉がありますけれども、変革というのはよほどいろいろな理由があって、いい方向に持っていかななくてはならないけれども、その背景にあるグローバリズムという思想はですね、私は基本的には間違っているというふうに考えております。だから、その中で「変革」という言葉を簡単に使ってほしくないというふうに思っております。で、4番目は、大学はビジネススクールではない、先ほど職能の話がありましたけれども、基本的にはそういうことをやる場所ではないんだ、ということをもう一度考え直さないといけないんじゃないかな、というふうに思っております。5番目は、教育において「勝てば官軍」でよいのか？と。要するにこういうことを言いたい。6番目は、発注者サイドにおける計画専門家の役割。発注者というのが非常に大事になってきている。ということで、計画の教育というものを発注者を見据えた教育がすごく大事になってきているんじゃないかということ。7番目は、これが結論であります。日本型で国際化に対応させるべきだということで、日本型の教育はどうあるべきか、ということを考える必要がある、というのがだいたいの流れであります。

で、最初から少し説明いたしますと、これは内田百間の言葉、これは夏目漱石の弟子でありますけれども、とぼけたことを言っておりますが、「社会にでて役に立たぬことを学校で講義するところに教育の意味がある」というふうなことを言っております。これを私は皆さんに本当にこの意味を考えていただきたいと思っております。どういうことかといいますと、私はやはり物事というのは「バランス」だと思うんですね。何でもバランス。で、もし社会に出てから考えることは何かといいますと、これは仕事になるとか、これは採算に合うとか、これはどことこの仕事がとれるとか、そういうふうなことが社会に出てから必ず考えないかんことですね。で、これは嫌でも社会に出たら考える。図面を綺麗に描く、プレゼンテーションをうまくやるとか、そんなことは社会に出てから絶対やらないかんこと。ところがですね、そんなことは社会に出たら嫌でもやらないかんことだけれども、それが天秤の片棒にあったとしたらですね、もう一方のほうに何かがなかったらバランスがとれないか、と言いますと、基本的には建築とは何かとか建築の価値とは一体なんだということを、本当に考えなかったら、バランスが取れないわけです。それは、一体いつやれるんだと言ったら、学生のときしか考えられないということだと思います。学生時代にこういうことを考えられなかったら、一生社会に出てからでもそういうことは考えない。結局ですね、一方のほうに偏った、アンバランスな状態になる。で、おそらく今の社会のいろいろな現象というのは、そういう状態にあるんじゃないか？ 場合によっては、大学の機能が非常に不全になっているというのは、そのバランスがとれていないというのが現状ではないか。というのが趣旨であります。ということを見ると、この内田百間さんが言っているのはですね、なにも「役に立たないことを教えるのが学校だ」と言っているのではなくてですね、その本当の意味は、私は今言ったように、社会に出てすぐに役に立たなくても本当に役に立つことを学校で教えなさいよ、ということを行っているんだというふうに、私は解釈したいと思っております。そういうのが最初の項目であります。

それではですね、これまでの計画系教育は間違えていたかと。で、これがやっぱりいちばん大事だと思いますね。間違っていたら当然変えないといかん、ということなんですが、これを何で評価するかというと、やはり生み出されてきた建築が果たして間違ってきたかどうかということだと思います。で、大きく考えますと、戦後の日本の復興期に建築がたくさん造られてきましたけれども、その中でいわゆる建築計画学が果たした役割というのはたいへんな功績があると思います。これは、問題はあったとかいろいろ言うかもしれませんが、私はやはり功績があったと。しかも、そこで生まれてきた建築計画学をもとにした建築計画教育というのは、これはたいへんな役割を果たしてきたと。それを、教育を受けた人たち

が、やはり日本の国土を造ってきたというふうに考えたいと思います。

それと、今日来ていただきました伊東先生はじめですね、たいへん優れた建築家を日本は生み出しております。これもですね、伊東先生も建築計画の大本山のご出身だということで、「私はそういうことは習ったけれどもそれはやってない」とおっしゃるかもしれないけれども、私はやはり伊東先生というのは日本の建築教育を受けて、世界的な建築家になられたということでもありますから、何も日本の建築計画教育が間違っていた、とかそういうことはいえないと思います。ただですね、一点やはり反省すべきことは何かと言いますと、こういう状況になりますと、良質な社会的なストックとしての建築を残してきたかということでもあります。現在、建築の寿命の問題が非常に大きく出ておりますけれども、果たして現在の建築が20世紀、21世紀、22世紀というふうにはですね、ずっと残るぐらいの名建築というのが、果たしてそういう建築を作ってきたか、となるとこれは大問題だと思います。非常に寿命が短いものをストックとして造ってきた。ということは、何もこれは教育の問題だけじゃなくて、根本的な日本の建築を造るシステムの問題だということで、これはやはり考えなおさないかんということでもあります。

もう一つは、これは伊東先生の疑問点の一つであるかもしれませんが、計画というのが出てきた結果のデータを教えるというか、そういうことに偏って、本当に建築というのとは何かとか、建築の価値はなんだとかいうことを教えることを少し怠ってきたんではないか、ということで、もし「変革」という言葉を使うとしたらこの辺りに非常に重要なポイントがあるんじゃないか、というふうに思います。

それと、なぜ「変革」か？ グローバリズムの正体ということなんですが、基本的には JABEE とか UIA とかっていうのは、貿易の問題とか国際間の経済的な問題が背景にあります。基本的には、大学における建築教育の本質とは何の関係もないことで、そういうものに巻き込まれて今、右往左往しているわけでありましてけれども、本当はですね、グローバリズム自身がですね、私はおそらく、これからアメリカ自身がこれから非常に大きな問題に突き当たると思います。例えば、エンロンの問題（注2）についてもですね、やはりアメリカ経済の体質的なもの、経済至上主義、そういうもの自身が本当に正しいのかどうかということは、これは国際的に考えないかん問題だ、ということで、その一端を担うこの UIA 問題なんていうのはですね、本当に正しいのかどうかということを考え直す必要がある、ということだと思います。

4番目は、大学はビジネススクールではないということで、これはたいへん年寄り臭い話になるかもしれませんが、やはり大学は基本的には真理を追究するところであって、いわゆる職業を教えるところではないというのが大前提としてあると思います。いわゆる institute は専門学校から大きく MIT のような大学になりましたが、それはいわゆる軍需産業と結びついたことで飛躍的に大きくなってきた、ということで、やはりですね、技術というものはその背景にはいろいろあって、その辺をやっぱりきっちり考えなかったらですね、いけないということだと思います。そういうことで、大学の役割というのですね、やはり、私はそのいわゆるアクセル機能、物事を進める機能と同時に、ブレーキ、社会にブレーキをかける機能というものが必要で、こういう機能を前提とした研究とか教育が非常に大事だというふうに考えるわけでありまして。

次は、教育において勝てば官軍でよいのか、ということで、これは非常に若い人にとってはですね、建築雑誌に載るとかコンペに勝つとか、これは何も悪いことではないと思います。で、しかも建築家といわれる人は当然そうあるべきだと思います。しかしですね、非常に一部のあれですけれども、できた時はたいへんすばらしいけれども、1、2年経つともう廃屋のようになるというような建築が雑誌を飾るというふうな時代であります。要するに、有名建築が必ずしも良質な建築ではない、しかもましてや名建築というのは全く無関係になりつつあるという現在ですね、そういう商業主義とマスメディアの相乗効果によって、ある意味では芸能タレント化しているような状況というものを考え直さなければならない。要するにですね、正当な建築が正当に評価される社会というものがなければ建築の教育というのができないというのをまず考えなければならないことだと思います。

それと 6 番目はですね、やはり優れた建築というのは当然建築家が優れているわけでありませうけれども、その建築家を選んだ発注者というのが、やはり優れていると思います。やっぱり発注者が、いかに優れた建築に対する認識を持つかということが大事で、しかしこのような複雑な社会、建築の状況になりますと、その発注者サイドにいかに専門的なアドバイス、共同して仕事ができるいわゆる計画の専門家というのが必要になってくる、ということだと思います。このあたりに、やはり私は建築計画の非常に大きな役割があって、発注者サイドにつく専門家の要請というのが非常に大きい。アンケートを見ましても、だいたい本当にデザイン教育をやっている学生はですね、1 割から 2 割まではいかない、学生のうちはですね。その他の計画の出身者はどういうところに行っているかということ、やっぱり発注者サイドの企業とか役所に勤めている。そうするといかにその人たちが計画に対するセンスを持ち、良質な設計者を選定する仕事に携わるかということが、いい建築を生み出す非常に大事な要素だというふうに思います。

7 番目は、日本型で国際化に対応させるべきだ、ということは、今まで申し上げましたことのまとめになりますけれども、いずれにしてもですね、あまりにこの国際的な動きにですね、右往左往せずにですね、やはりじっくり日本型のよさ、そういうものを見つめた中で、しかし、今まで通りいいというわけじゃありませんから、デザイン教育も含めたシステムを考えるべきだ、ということで、その場合はですね、そこに書きましたような絵ですね、できたら、まず 4 年間の教育というのは JABEE の内容に配慮しながら変えていくと。で、この UIA に対しては、大学院のマスターコース 2 年を含めた中で、いかに建築計画なり他の計画系とデザイン教育をマッチさせながらやるかということをも日本独自で考えていくという姿勢が非常に大事ではないかなあ、というふうに考えております。

少しはしよりましたけれども、だいたい以上が計画系の内容でございます。終わります。

【服部岑生】

後々、伊東先生との丁々発止があるかもしれませんが、楽しみにしています。引き続いて都市計画の分野から北原先生にお願いいたします。

【北原理雄】

都市計画分野からのパネリストとして指名されております北原です。

資料の 13 ページ、柏原先生の書かれた表の中に、左の方から設計計画・環境設備・構造・生産・建築史、とありますが、都市計画はその次の「その他」の中に入っています。

で、私の発言趣旨はその後の 14 ページ、15 ページに、ほぼ簡単に整理してあります。1 から 5 までの項目をあげていますが、1 は初めに、ということで 2 から 5 までの、一応四つの論点を提示しています。1 番目が広義の都市計画との関係、2 番目が建築学の諸分野との関係、3 番目が知識と技術との関係、4 番目が国際化と地域主義ということで、タイトルにもありますように都市計画教育の役割とビジョンということで、都市計画は...都市計画は...と言い募っております。これは、一つは多少挑発的な文章を書いて議論を活性化しようというサービス精神なんですけど、もう一つは先ほどの「その他」の中に入ってしまう都市計画分野としては、せめてお腹を膨らませているカエル並みに頑張ってみようという文章でもありません。そういう意味で「都市計画」「都市計画」という書き方に若干なっておりますが、必ずしも都市計画だけを念頭においているわけではなくて、建築計画、大家さんの建築計画も含めて建築系一般も視野に入れながら少し話をさせていただきたいと思います。

まず、広義の都市計画との関係ですけれども、都市計画分野では建築学会だけでなくその他、例えば都市計画学会というようなところでも活動しているメンバーが多いんですが、そういったところでは土木、造園の方たちとご一緒することがあります。そういう中で建築の領域における都市計画というのは一体どういう役割を担っているのかな、と他の領域との比較でいろいろ考える機会も多いわけですが、物的・社会的という二つの面でここでは整理してありますが、物的に言えば都市空間を構成する要素としての、要するに、建築の側から部分の側から、この側から都市空間を考えている、都心の環境を考えている、そう

いうアプローチをとっているのが、多分土木や造園との大きな違いだろうと。社会的に言えば、都市に暮らしている人々の生活の側からアプローチしている、これは建築というこの側からアプローチしているということと対になっていますが、そういった面が大きな特色であろうと思います。で、これは、ただ土木や造園との比較ということでこうなっているわけですが、今日話題になっている計画系教育全般について、要するに建築学会での教育とか研究ってというのがどういう特色を持っているか、ということの一つの大きな側面ではないかな、というふうに思っています。要するに、都市とか都市空間、都市環境を建築というものの側からとらえていく。そして都市に暮らしている人々の生活の側からとらえていくというスタンスがおそらく、計画系の教育の一つの原点となりうるんじゃないかな、ということを考えています。

それから、2 番目の建築学の諸分野との関係、ということですが、これは、建築設計・計画ですとか、環境設備、などとの関連の中で都市計画というのは一体なんだろう、ということを考えてみたいということです。一言で言ってしまうと、都市・建築学会を構成しているような諸分野との関係の中で、都市計画という分野が何を教育していくかということ、単体としての建築を、もちろんそのための計画設計の技術というのを基礎にして、建築が集まって都市空間を形成し、都市環境を形成し、市街地の環境をはぐくんでいく時の、どういう関係性が発生してくるのか、どういうプロセスをたどっていくのか、それを理解し、そういった関係性やプロセスを構築し、調整することのできる人材を育てたいと。ただし、これも完全にそういう能力を学部教育でマスターさせられるということではなくて、そういった視点をきちんと持った人間を育てたいということになると思います。そこで、やはり計画系教育全般に対して非常に大切なんではないか、と思っていることは、向う三軒両隣りの視点というのを学生にもたせるような教育をしてほしいと。14 ページのほうに入って少し挑発的な文章になりますけれども、従来の建築教育、とりわけ設計教育はこの点に関して、きわめて無頓着であったと言い切っています。この場合、設計教育と言っていて、建築家そのものを念頭に置いて文章を書いていません。ですから、柏原先生と違って私は伊東さんを念頭に置いて何か議論しているわけではありません。どういう点で無頓着かということ、一つの例でここであげてみますけれども、相隣条件をかいた仮想の敷地でしばしば設計課題が出題されている、と。それからそれと対応していますが、世の中に流布している建築情報というのが周辺の状況を欠落させたまま発信されています。例えば、建築学会の出している作品選集の 2002 年版ですが、94 作品が収録されていて、その 8 割近くが敷地内しか書いていないと。図面が提示されているものが敷地内しか書いていない。外周道路さえ十分に示していません。周辺の状況をはっきり示した図版を載せている作品は 1 割程度であると。これはもちろん、見開きの中にいろんな情報を詰め込み、という非常に制約の厳しい条件の中でどういう情報をだすかということなんです、そういった時に、作品選集、いわゆる作品を発信しようとする人たちは周辺情報を欠落させてもよいというふうに、ある意味では価値判断をしている、ということだろうという気がしています。都市計画部門では、今日午前中、この同じ会場で「都市設計計画の教育をめぐる」というパネルディスカッションを行いました。70 人ほどの参加者がいて、非常に画期的に人がたくさん来てくれたと思ったんですが、午後はその 3 倍近くどうも人が来ているようですね。その中でいろいろな議論があったんですが、今もお見えになっている三井所先生が、同じような向う三軒両隣りの話をされました。で、設計課題の中で向う三軒両隣り、6 軒の住宅の敷地が並んでいる設計課題を出されたそうです。その 3 軒と両隣に囲まれた 1 軒の敷地に家が建っていない。他のところには家が建っている、と。で、両隣の家は南側にゆったりと庭をとって北側に寄せて建物を建てている、そういう条件で設計をさせた、と。で、いろいろな設計作品が出たようですが、その中で一つ三井所先生が紹介されたのは、いちばん敷地の南側にリビングを造って、そのリビングの両側の窓から両隣の家が芝生が見えるという設計をしたと。先生はそれに対して「けしからん」と。要するに、向う三軒両隣りに対する作法としてこういうことはあってはいけないという判断をしたそうですが、同じスタッフの中で、建築家の方が非常にユニークで個性的な設計だと言って褒めたんで、三井所先生によると大喧嘩になったということなんです...。個性的であ

ること、要するに素直にみんな南側に庭とって北側に寄せて建てている、そういうところに建てる時は同じようにやろうね、っていうのはこれは向う三軒両隣の作法ですね。ただ、戦後の建築教育というのは、そういう素直な発想っていうのは凡庸である、むしろひねった、もっとひねった個性のある回答を求めるといって教育をしてきたきらいがあります。それは、やっぱり、生活の側からの視点という点ではちょっと違うだろうという気がしています。計画系教育を考えるとという点で、もちろん独創的で個性的な人材を育てるといって必要なんです、その前段として、やはり社会的常識を備えた、建築っていうのは一体何のために造るのか、街に住むということはどういうことなのか、社会の一員として都市の市民になっているというのはどういうことなのかということを中心に理解して、その上に立って、それぞれの条件に対して個性的な回答を出すような、進み方が初めから崩した回答をだすのを良しとするような教育ではやはりまずいだろう、というような気がしています。

4番目の、知識と技術の関係ですが、これも都市計画だけではなくて、計画系の教育あるいは建築の教育全般に関わることで、やっぱり、建築という、人の暮らす場所、そして都市になるとそれが少し広がって向う三軒両隣り、あるいは界隈といった地区のスケールからさらに都市のスケールというふうになくなって大きくなっていますが、そういう生活の場を扱う学問というのは、やはり座学のみでは成り立たない、演習が非常に重要な役割を占めている。私もUIAがいろいろ言っていることっていうのは、ほとんど何だかよくわからないんですけども、設計教育の比率を講義に比べて高くしろ、半々にしろ、という要求があります。で、それを演習という形で少し広く理解するんだとしたら、僕は座学と演習というのは半々ぐらいでもいいかな、と思っています。今の、教育のプログラムの中ではおそらく単位数でいくと5対1とか、それぐらいの比率だと思いますけれども、やはり半々くらいまで持っていった方がいいのかなと。ただし、それは教室と製図室の壁の中で、製図版の上に乗せた白い紙の上で、相隣関係を欠落させて習得される技術ではなくて、現場に出て、現場の中で、やはりそこで生活している人々、あるいはそこでの環境形成を預かっている、必ずしも十分に機能していないけれども行政の人たちとか、できれば建築だけではなくて他の領域の、土木とか造園とか、あるいは社会学とか、そういった領域の教育者になるのか、あるいは学部レベルでは教育者ぐらいだと思っただけですけども、大学院になれば学生同士も含めて、ある種のコラボレーションをしながら教育を受けていく、そういう場面をもっともっと準備していく必要があるだろう、というふうに考えています。

最後の国際化と地域主義ですが、JABEEに関していえば「国際化が進む社会の要請に応えた高度な専門性実現の機会として捉えることができる」というふうには書いてありますが、本心は全くそういうふうには思っていない。国際化とかそういう国際基準というのは、ある意味では避けられない部分があります。ですから、避けられないものは積極的に対応したほうがいいという気もしますが、ただ建築の世界、都市計画の世界というのは、その地域、そのエリアの歴史とか文化とか生活と密接に関わってきている、非常にローカルなものです。やっぱりローカルなものに対応したシステム、固有のシステムというものがあるはずで、それをあまり固い国際基準の中に押し込めないほうがいい、そういう気がしています。ただ、現在、建築学会で検討しているJABEEへの対応の仕方というのはだいぶ非常に柔らかいものになってきている。それぞれの最低の基準で、あとは特色を、それぞれの大学がおかれている地域の条件も織り込みながら対応できるものになりつつあるのかな、という点は感じています。

ということで、とりとめもない話でしたが、多少問題提起になればと思います。これで終わります。

【服部岑生】

ありがとうございました。柏原先生の、箱の中の「その他」が都市計画という話、どういうふうに皆様受け止められましたでしょうか？

【北原理雄】

楽屋話をしますとですね、この前の打ち合わせのときに、この「設計・計画」のところには都市計画は入

れてもらえるの？って、同じ千葉大学のよしみで服部先生に伺いをたてましたら、「入ってないよ」と言われました。

#### 【服部 岑生】

JABEEの話とかUIAの話は皆さん、今話題が出ましたのでちょっと付け加えますと、緑色の本(注1)のいちばん最後のところにUIAの勧告というのがあります、その5章の中をご覧くださいますと、これが「設計・計画」の条件として彼らが言っているものです。その中に都市計画はもちろん素養としては入っているんですが、建築家を養成するための一つの素養ということであって、都市計画家を養成するための基準ではないということですね。ここで、あまり議論しても仕方ないんで、次は重村さんをお願いしますが、重村さんはもう少し農村計画の専門の方ですけれども、ご存知のとおり設計者でもありますし、UIAとの関係、JIAを通してUIAとの関係もあられますので、設計ということの新しい方法論までご提案いただくように伺っております。お願いします。

#### 【重村 力】

ご紹介いただきました重村でございます。今日は、服部先生や岡崎先生のセッティングが非常にうまくてですね、話がすごく上手につながるようになっていないかと思っているんですね。その他の都市計画のさらに外側に、市街化調整区域とか農業振興区域とかあるんですが、そちらのほうから参りました農村計画委員会の重村でございます。ただ私はあの、そういうものをやっている人間としてどういうふうに設計に関わっていくかというお話をしたいと思いますし、それからまた、スタジオ教育と言うことがこれから問題になってくると思いますんで、私の大学でやっているスタジオ教育に関してはですね、企業秘密なんでこれは隠しておきまして、外国で私が関与してきましたスタジオ教育について、ちょっとご紹介しようと思います。

まずですね、はやりの言葉で言ってみたんですが、「建築学は設計科学であり、デザイン提案のための科学であり、認識科学ではない」というのはですね、これは日本学術会議の吉川弘之さんなんか学術の動向なんかをご覧になるとわかると思うんですが、科学全般を設計科学と認識科学というふうに分けておられて、設計科学には政治学とかですね、そういう目的を持った学問はみんな設計科学に入るわけなんです。なぜそういう反省をしなきゃいけないかという、従来はその認識科学を、単純にあることに意図的に適応できるということで適応してきた結果、原子爆弾とかポリーションとか起こしちゃったわけで、設計科学というのは価値観をその中に持ってスタートしなくちゃいけないんじゃないか、そういうものが設計科学だろう、というふうな議論があるんです。学術の動向でだいぶ議論されていますんで、ご覧になったらいいと思います。

もう一つはですね、先ほど来、北原先生のお話の中にも出てきたように、建築っていうのはとにかくフィールドに建っているわけで、特にもう、農村計画なんていうのはフィールドそのものなんです、フィールドを重視し、既存の環境の中から建築や住まいを、いや、生活を構想することが大切であるということですね。まずそういう基本を私たちは忘れちゃいかん、と。それから今、JABEE 黒船論もありますけれども、僕らが今っていう時点で何か考えていくっていうのは、やはり地球環境と生命的要素、それから実は私たちが生物環境に依拠しているサステイナブルな環境と社会というものにどう貢献できるか、っていうそういう建築の設計科学を作んなきゃいけないと思うわけです。

それで、ちょっとショッキングなことを言え、と言われてますんで、いろいろ恨みつらみを言いますとですね、日本の建築デザイン教育や一級建築士制度はあまりにもフィクションに満ち溢れていて、その虚構性を引き剥がして反省して、本当に役立つ制度は何なのかということを考えないといい教育の仕組みはできない。で、これはここにいらっしゃる先生の大学は、僕は大丈夫だと思うんですけども、全国170なんぼというものがありますんで、そういうところはきっとそうだろうと。大学というものは一般に入試を重視しつつアウトカムの評価は疎かであったと。卒業生の数字を客観的に、あるいは絶対評価的に保証

する慣習を持ってこなかった。これは、日本では、と言いたい。これはちょっと喧嘩売っているんですが、日本の建築教育はホーリスティックと言いますが、卒業生の多くは、最低限の建築設計を理解する水準に達しないまま社会に放り出されている。で、僕は教育制度を議論するときには最低を議論すべきだと思うんですね。そうすると、日本の現代建築文化の底辺の水準は低すぎると。風景がひどい。特にアメリカやフランスと比べたときに、一流はね、そこそこいいんですよ。三流、四流、五流の建築がひどすぎるんですね。で、もちろん非合法のスラムだとかそういうものはしょうがないですよ。しかし、合法的な建築がひどいんですね。これは、資格制度と教育制度が悪いからではないかと思ってしまうわけです。で、資格制度が悪いとすると、その関連した教育制度が悪いんじゃないか、と思うわけです。さかのぼれば、大学も一級資格もなかったときの、私たちの建築文化の底辺は、世界の同時代に比して非常に高かった。風景は美しかった。丈夫で快適だった。

で、もう一つはですね、ホーリスティックにやっているんですけども、例えば一個一個の科目で何を議論してですね、どういうシラバスを書いているんですね、だいたいみんなどこまで書いているのかと大学の仲間同士知らないというようなね、そういう実態なんですね。うちの学校はそうじゃないと思うんですが。そういうふうに聞いております。

もう一つは、私たちの建前はですよ、よい建築者とか設計技術者っていうのを学部教育のゴールに考えて、その中から高度な専門化を育てて、さらに研究や教育の前線を支える人材を育成する、っていうふうになっていけばいいなあ、と思っているんですけども、そのためにやっていくような科目のシラバスの体系だとか、こういうことを教えるからこういうふうには研究者が育つんだ、とかそういうふうにもなっていないっていうわけですね。で、4年の短い課程の中に、教養の名残を残し導入が不十分なのは、一方では研究の真似事をさせると、4年生がやっていることが、あれが研究と言えるのかと。あるいは実験や調査の作業実習員をさせるというプログラムに無理があるのではないかと。で、それは大学の学部教育の教育上の位置づけと大学院教育における研究者養成の混同と混乱に要因があるんじゃないか。

で、もう一つは大学における建築教育に携わる人々の、つまりわれわれですね、の養成課程に問題があるんじゃないか。で、はっきり言って、大学でいるんなら講義でやっている建築教育は、先生がその専門である場合は、最先端なことをやっているんですが、ほかの事はだいたい20年くらい遅れているんですね。ひどい時はその先生が学生だったときの知識でやっているわけです。で、もちろん僕はね、実学的な学校をつくれって言っているわけではなくて、大学の役割を知るためには、社会の関心を大いに意識したうえで、将来を見越した教育や建築学の未来を拓く研究が必要だと。

で、こっからはね、皆さんとだいたい一致しているんですけども、6年間の国際水準に対する計画デザイン教育を構想すると。ただ、もうちょっとはっきり言いたいのは、主軸は設計スタジオ教育であって、それを支える講義や演習や実験があって、フィールド研修があるということと、それから設計監理インターンっていう制度を組み合わせる、ということが重要だと思うわけです。で、研究者養成コースっていうのは、むしろこの6年生コースを人材の輩出源として、長すぎないPh.D.転換コースを造ることによって活性化する。例えば、6年終わってから3年っていうのは、僕は長すぎると思うんですね。そんなに長く研究していると、5年間も研究していると、シャープさを失うと思うんですね。だから、この辺は大学院の話なんで…。ま、そういうふうに僕は思っています。途中から飛び移るようにできると。

もう一つは、教員登用の仕組みを変える必要があってですね、学外との人事交流を活性し、本当の計画デザイン教育の現場を支える若手こそ行ったり来たりした方がよくなって。で、彼らの学外研修も重要だと。

それからもう一つは、社会を周囲にひきつけてくるっていう方法があって、例えば建築設計院とか研究センターのようなものを持つ、っていうのもありますけれども、固定化するとよくないかもしれませんから連携機関をいろいろ持つというような方法もあるわけですね。

それともう一つは、農学部なんかは演習農場とか演習林を持っていますけれども、私たちもさまざまな

まず、課題発見したり問題解決の形を実習したり、それからいろんな主体や関係者と交流共同していくためにフィールドワークを中身に組み込む必要があって、そのためには、大学の周囲のみならず演習地域や拠点を複数持つ必要がある、と。で、これについてはあとでご説明します。

それからもう一つは、基本的には先生方のプロモーションの評価の対象に、やっぱりデザイン的な成果であるとか、もう一つは教育業績をもっと高く評価するべきだと。で、それこそが計画学をインターナショナルなものに変える必要があるというわけです。で、ここでうまい具合に MIT が出てくるわけですね。MIT で Teams of Studio というのを 87 年に、私たちがやりましたけれども、MIT というのはものすごくおもしろくてですね、まさしく柏原先生がおっしゃったような小さな専門学校が軍需産業と結びついて、もっと言えば右翼的にですね、邪悪なアメリカ帝国主義の研究機関なんですよ。ところが、建築学部は左翼なんですね。それも見てもらったらわかりますけれども、ケビン・リンチ (Kevin Lynch) とかジョン・ハブラーケン (Nicholas J. Habraken) とかモーリス・スミス (Morris Smith) とか、あるいはジョージ・ケッペシュ (Gyorgy Kepes) とかっていう人は、ケビン・リンチさんから僕はじかに聞いたんですけども、そのレッドパージになってどうしようもなくなった時に、大学に隠したんですよね、彼が。そういうまあ、伝統を持っているわけです。MIT で私たちがやっていた studio というのは、まさしく廃線になったですね、昔の築地の線路の敷地をみんなそれぞれ選んでですね、みんなで作ったものをはめ込んでいって、一つの街を造っていく、造り直していくってことを大学院生を対象にやりました。ですから、北原先生がおっしゃったような、ま、一人一人がですね、ちょっと目立ちすぎるものを造りすぎているんですけども、一人一人がやっているものを街の中にはめ込んでいって、それで全体としてまた評価していくという方法をやってみたわけです。ま、こんなような空間でやっているわけですね。その赤い服を着ているのが富田玲子であります。で、窓辺でいろいろ聞いているのが丸山欣也であります。それで、一方その隣にですね、ハーバードの有名なセルト (Josep Luis Sert) の設計した製図室がありまして、この方はそれこそさっきの柏原先生のお話に出てたようなすごい上昇志向の学生の多いあれでありまして、上昇志向に非常に都合がいいように製図室ができておりまして、いちばん下が 1 年生で、二番目が 2 年生、3 年生、4 年生、5 年生、6 年生というふうにあがっていくようになっておりまして、下級生は上のほうにあがって上級生のを手伝うと。それで、何時に行ってもコウコウと電気がついております。これは MIT とずいぶん風景がちがいます。で、一方で、MIT ですね、その低学年教育をどういうふうにやっているか、これがまたまさしく先ほど北原先生がおっしゃったようなことと関係するんですけども、これは今どういう場面かといいますとですね、みんなこれで敷地を造っているんです。でね、2 年生、3 年生に対する授業で、ハブラーケンなんか考え出してですね、いまシュンカンダ (神田 駿、MIT 講師) さんとかそういう人たちが 87 年ごろ教えていたんですけども、こういうみんな一つ一つ、これ 30 分の 1 くらいだと思んですが、こういうなんかあんまりうまくない家をみんな造るんですよ。それで、それから後期になってですね、今度はみんなで敷地を造り始めるわけです。雑壇分譲地みたいなものを。で、順繰りにひな壇分譲地造っていて、塀を造るかとかなんとかがいろいろやっていってですね、それでそれをだんだんだんだん、(その間の写真がないんですが) これ調整していくわけですね。真ん中にあるのがカンダさんで、その隣にいる女性がクリスティーナって言って、ハーバードから来ているティーチングアシスタントで、しばらくわれわれのオフィスにおりましたけれども、そういうふうにして、要するに本当に敷地を造った中で、環境調整しながら相互の隣の建物を変えあったりしながら、調和ある街は何かっていうのを作っていくわけですね。ですから、これ都市計画教育と建築計画教育、あるいは農村計画教育と都市計画教育、そういうものを全部一緒にしたデザインスタジオ教育なんですね。一個一個のものは、まあこういうつまらない、つまらないって言ったらあれですけども、一人一人のものはそんなに個性がそんなにないものでありますけれども、ちょっと出来上がりの写真が見当たらなかったんですみませんが、まあこういうふうなあれであります。それから 93 年に Teams 駅伝 Studio というのをユニバーシティ・オブ・テキサス・

アット・オースティンというところでやりました。オースティンというのはまあこういうコロラド川に面したすごく綺麗なところなんですけれど、すごくすばらしいキャンパスがあって、製図室に入って、僕が非常に笑っちゃったのはですね、次の写真は私の神戸のアトリエなんですけれども、全く雰囲気おなじなんです。それもまあこんなコーナーの中で、この人は中国留学生ですし、これはノースキャロライナから来たティーチングアシスタントで、これはテキサスの富豪の息子で、なんかブッシュさんが昨日来た、とかというような人ですけれども、これも既存のフィールドを選んでそのフィールドの中です。各自が問題地域を見つけて、そこに改造提案して行って、そういうものをみんな集めてきてですね、このときは私たちがやった方法は、全部一回でき上がってからいろんなフラグメントを交換し合うと。交換し合ってそれをまた再解釈して行って、それで一つのどんだけの街になるかっていうのをみんなで作ってみる。ま、こういうようなことをやりました。それからもう一つ、これは僕は中国で86年にやったのをご紹介します。つまり中国っていうのは一つはロシアの影響があります。ロシアっていうのはエコール・デ・ボザールのフランスの建築教育の影響があるわけですね。それから、大連工学院っていうのは、今大連理工学院ですが、昔1930年頃ですね、北京清華大学とそれから南京工学院くらいしか、くらいしかって言ったら失礼ですけれども、有名な立派な建築工学の大学がなくてですね、それで、清華大学には梁 思成(りょう・しせい)という近代主義者がおりましたですね、近代建築派ですね。それで、南京工学院には楊 廷宝(よう・ていほう/ヤン・ティンバオ)とかですね、『中国住宅概説』を書いた劉 敦楨(りゅう・とんてい/リュウ・トンツン)とかいうそういう立派な人がいたんですが、南京系の人が大連に来て新しい学校を造るので、半年来てくれと言われてですね、半年は行けないよっていうので100日行って本当に死ぬ思いだったんですけれども、これが86年の、昔日本橋といった勝利橋っていうところですね。これは満鉄職員の中級幹部の住宅でありまして、実はここで「ラスト・エンペラー」の撮影がありまして、これがジョン・ローンですけれども、実はこの場面の中には私が出演しておりますけれども、これがベルモイッチで、坂本龍一で、全くお楽しみのスライドであります。こういう教室で講義をしているわけです。学生はこの一部屋しかないんです。30人の。中国のエリートです。中国中から来てまして、「君はどこから来たの?」「ウルムチから来ました」「どうして大連に来たの?」「海が見たかったから」とかそういうような、ほんと中国中から超エリートが来ているわけです。それで、普段この部屋でホーリスティックに何の講義でもやっています。ただ、エンジニアリングの講義は少ないんですが、ところがそこですね、ある段階までは1週間に何回かエスキス・チェックをする場ですが、ある段階から他の授業が全部ストップしてですね、何週間も製図に専念するようになるわけです。それで、ただ図面の描き方はものすごく古典的です。今の若い学生諸君は知らないと思いますが、紙をテープでぴたり霧を吹いて貼って、そこに薄墨を塗って...っていうようなこと、昔やっていたかどうか、そういうことを知っている人はもう相当の人だな、という感じでございます。しかし、こういう学校でもこうして私頑張って教えますですね、だいたいそもそもフィールドワーク型でやろうとするとですね、問題地区の発見となんていうとこれ国家機密に関わるわけですよ。で、いろいろお願いしているうちに政治協商会議の副主席っていう人と出会ってですね、その人に「実はこういう教育をやりたいけれども困っているんだ」と言った途端に「よし」と言って、2500分の1の地図なんか全部出てきてですね、その学生諸君とフィールドワークをやって、カルチュラルセンターを造る人もいるし、病院を造る人もいます。そういう形でやっていると、例えば、この子のあれなんかは古い中国式のあれから出てないんですけれども、今出ている学生のなんかは日本のコンペに出しても佳作ぐらいにはなるかなあっていう。そういう作品が出てきたりしました。

ここにあるのは魯迅の像ですね。これをスケッチするわけですね。これがダビデ像でないところが中国だと。実に帰る頃にはマイナス20度という世界でございます、いろいろな世界のdesign studioの教え方っていうのも、日本も別にこんなふうにやってもいいんじゃないかっていうことで、私のあれを終わりにします。

### 【服部岑生】

ありがとうございました。なかなかおもしろい話で、もう少し詳しく聞きたいという感じでした。今後の設計教育の中でフィールドとか studio 教育っていうのが非常に本質的な教育の方法であるというようなことで資料を展開していただきました。それでは、歴史意匠のほうから羽生先生にお願いいたします。

### 【羽生修二】

歴史意匠からまいりました羽生と申します。いつものメンバーとは顔ぶれが違うということで、こういうお話をするのはたいへんどキドキするんですけども。まあ、歴史意匠の中ということで、特に私が設計教育に対して一つ考え方を持っているということでお声がかかったと思いますので、歴史意匠の中ではあんまり聞いてもらえないようなことを、皆さんの今日いらした方のほうが賛同していただけるんじゃないか、ということをお願いしてお話をしたいと思います。

今まで3人の先生方の話していることを聞いていると、なんか私の話したいことがだいたいみんな共通するところがいっぱいあるんですね。まず、柏原先生が役に立たない、まさに歴史意匠なんていうのは全く役に立たない教育をしているんじゃないか、というそういう考え方もあるわけですし、一級建築士の問題の中にも歴史なんか1題か2題くらいしか出ませんので、あんまり勉強してもあんまり役に立たないというようなイメージを持たれると思います。それからやはり建築の価値ですね、先ほど先生がおっしゃった価値っていうのを考えるのは、やっぱり建築計画以上に歴史意匠はあるんじゃないかと強く私は言いたいと思いますので、またその点も是非また後でお話したいと思います。北原先生のおっしゃっているような、いろんな分野、建築の諸分野だけじゃなくて、いろんな建築歴史の場合は文科系の学部とかそういう分野とコラボレートする、そういう人材を育てるのは歴史意匠の役割の一つだと思いますし、そういうふうなことを調整できる人材を考えるっていうのも都市計画と同じ、それ以上にもっと幅広い分野からの調整役っていうもので歴史意匠は重要な役割を果たせるんじゃないか、っていう感じがいたします。それから今の重村先生のお話にありましたように、私も歴史の中で特に調査、フィールド調査を非常に重視する教育をしておりますし、先生がおっしゃっていたようなお話が本当に全く同感であります。既存の環境を考えること、そしてこれからの環境問題を、既存の建築物というものを壊さずに活かす方法っていうものを模索するっていう点では、修復・保存・再生っていうことをずっと長い間訴えてきた歴史意匠の考え方とやはり一致するんじゃないかと思いました。ま、そういうふうな今までのお話を伺っていて、私の立場もなんとなく明確になってきたと思いますけれども、一応18ページ、19ページに今日のお話の内容のレジュメを書かせていただきましたので、それをちょっと簡単に説明しながら、私の考え方を述べさせていただきます。

建築が、日本の建築が非常に先駆的な位置に現在あるというのは、やはり正しい建築を造り続けてきた、造るということに非常に熱中してきた歴史があって、それによってすばらしい、世界的な名建築家を輩出してきたんじゃないか、ということは皆さんも同感だと思います。しかし、その造ることだけに、目指してきたこの日本の教育の中で、北原先生がおっしゃったように、やはり向う三軒両隣のことを考えない教育とか、既存の空間に対して何らかの配慮をしたり、そういうものを活かせるものを破壊してきたスクラップ・アンド・ビルドを繰り返してきた、そういうふうなことも実際に行ってきたわけです。そういうふうな中で、歴史っていうのは造るというよりも守る側で、一時対立する立場にあったと思います。その対立するということは、歴史意匠の人たちは造らないんだ、設計するということに対して否定的だというイメージを与えてしまったことはあるわけです。そして、歴史意匠のほうは文化財建造物の保存・修理っていうような形で、建築学科の中で生きる道を見つけてきた時期もあったと思います。それから計画系、いわゆる造る側の教育の先生方と、守る側、残す側の立場の歴史家たちの二つの溝っていうのは非常に大きく開いた時期がかつてあったと思います。しかし、現在この造る側のほうも、地球環境問題もあるし、それから都市の周辺環境との関係、住民の問題とかいろんな問題が出てくる中で、果たして今までと同じ

ように、ただ単に壊して造るということでもいいのかという考え方もだんだんと生まれてきた。都市計画では修復型の都市開発というヨーロッパや欧米ではすでになされていることがだんだん日本にも強く叫ばれるような時期になってきていますし、計画のほうでもストックとしてのやはり建築ということを考えていく、そしてリサイクル、というふうな最近テレビやなんかでも番組で「ビフォー・アンド・アフター」(注3)なんて番組が出てきて、少なくとも何か壊して新しいものを生み出すというよりも、あるものを活かすというふうな方向にだんだん目が向けられてきた。そして、一方で壊すことを反対して守る側であった歴史側のほうとしても、ただ単に文化財的な、凍結した復元主義的な保存っていうのに疑問を持ち始めているというのも事実です。で、保存すべき建物の対象となるのがほしい、かつては社寺とか、凍結保存してもかまわないようなものであったのに対して、近代建築であるとか、街並みであるとか、産業遺産であるとか、どんどん対象となるものの建築物の幅が広がってきている中で、その建築をただ昔に戻すとか、そのままの状態でも博物館にしておくというような発想ではこれはいけないというふうな時代になってきています。そして、住んでいる人たちや使う人たちのために新しいデザインっていうのが介入することが望まれる時代になってきている。実際に、震災の後の建築物の保存っていうのは、構造の補強っていうのが絶対必要になってきていますし、そのために新しい技術で補強されて、やりすぎなぐらいに現在、文化財の保存が行われているわけです。そしてそこに新しい設備が当然必要になってきますし、設備のほうからもそういう歴史的建造物を活かすための新しい提案を今求めようとする時代に今なっている。そしてまた、デザインっていう新しい新築する建築のためのノウハウが、やはりこういう歴史的建造物の再生のために必要になってくるという、そういうふうな残す側、壊すのを反対する側の歴史のほうからも、徐々に徐々に、新しい技術なり新しいデザインを求めて介入することを積極的に認めようという、私もどちらかというところそういうほうなんですけれども、そういうふうな二つの溝がだんだん近づいていく中で、この設計教育の新しい姿が何か、もしかしたら見えてくるんじゃないか、というふうに私は考えているわけです。

そういうふうなことを考えている中で、私はフランスのパリで2年間、フランスの歴史的建造物を修復する建築家を養成するための学校に行ってきた、その経験っていうのが今まさに日本の教育に活かせるんじゃないか、っていうふうな気がだんだんしてきているわけです。私が行ってきたパリのシヨー宮っていうエッフェル塔の前にある、最もエッフェル塔がよく美しく見えるテラスがありますけれども、それを囲むような博物館がある。その中に学校があるんですけれども、2年間の講義で、週月曜日と火曜日に集中的に朝から晩までやって、翌週休みっていう隔週2日っていう授業で、いわゆる一級建築士っていう、向こうではないんですけれども、一応エコール・デ・ポザールとかそういう建築の専門学校を卒業した、資格を持った人たちを対象にする講座があったんです。ほしい設計事務所に行ったり、実際に文化財の修復を担当しているようなそういう建築家たちが1週間、その月曜と火曜に集まってそういう講義をするという、そういう内容なわけです。そういう中で、日本の修復っていうのは、それまでずっと私たち調査をしたりして、大学で学んできた保存っていうのは復元主義ですね。実際調査をして、先生がその赤ペンで痕跡の図面を書いて、かつてはどういう間取りであったとか、どういう構造であったとか、復元することで調査報告書はいつも終わっていたわけですけれども、そういうことがフランスの文化財の修復家を養成する学校では、そういう段階では終わるのではなくて、次に設計することに繋がっていくわけです。その建物をどういうふうにして新しい時代にふさわしい形に再生させるか、それを設計する課題が基本的に最終的な提出する卒業設計になるという、そういう内容のもので、決して過去のもので終わらないところに驚きを感じていたし、そういう教育が果たして日本にはあるのか、ということをして日本に帰ってきて感じてですね、いろんなところでそういうことを訴えてきて、それから20年以上経ちましたけれども、ようやくそれが二つの別々の建築教育の中の二つに分かれていたものが合流する時代がまもなく来るんだな、というふうな予感がして非常に嬉しい時代になってきたな、っていうのはあるんですけれども、そういう

この歴史とそれから新しい建築を設計する、この二つの流れってというのがどこで交わるのか、どういところで合流するのかっていうのはこれからの今日のお話の中でもだんだんとそういう議題も出てくるんじゃないかと思えますけれども、基本的に先ほど柏原先生がおっしゃった「建築の価値」っていうものをやはりいちばん重要じゃないか、というふうに感じるわけです。例えば歴史的建造物の歴史的な価値っていうのをわかっている建築家が、やっぱり新しいデザインを提案してほしいんです。それはもうこれは必要ない、こんなのもう変えてもいい。だけど、これは残してほしい、これはどんなことがあっても残さなきゃいけないということがわかっている建築家がすばらしいデザインを提案するんでしたら、これはわれわれ歴史のほうとしても、安心して建築家たちにこういう歴史的建造物の再生をお任せしたいと思うわけですけれども。とにかく自分のやりたいことをやる、この既存の空間なり既存の建築というものになんの思い入れもなく、なんの知識もなく、それを一つのファッションのような形で勝手に自分の解釈でそれを新しいものに再生させるっていうのは、やはりそこに歴史家として「待った」と、ストップをかけなきゃいけないっていう、そういう認識が大事じゃないかと思えます。そういうふうなところで価値をどういふうにして見出すか、それは私は今の大学院教育の中で考える教育、知性っていうものは非常に大事ですけども、いちばん大事なのは感性ですね、感じる力っていうものをやはり教育の中で是非教えていきたいっていうのが私の考え方ですね。感じる力っていうのは一人一人が感じる力っていうその感性っていうものが基本にあるっていうことだと思うんですね。そういうわれわれがそれを感じる力っていうのをどう養うかっていうのは、私はやはり歴史的な建造物なり、歴史的な建築の中で感じる力を是非取得してほしいと。現代建築にはすばらしい建築もいっぱいあるし、これは古い建築だから見なくたって、新しい建築で十分感じる力は得ることができるというふうにおっしゃるかもしれませんが、100年、200年、何千年もの間に多くの人々から愛された建築に、感じる力が訴える力がいちばんあるんじゃないか、っていう、私の独断かもしれませんが、そういう長い間愛される建築というものに触れることによって、感じる力っていうのは、建築雑誌のコンペに載ったような作品とかそういうものから感じる力とは違うんじゃないか、というふうに私は信じたいと思っていますので、そういうふうなことで建築の建築を考えたいなあと思っています。

そういうことで、私のレジュメの「終わりに」っていうところで書いたんですけども、いろんな建築の教育には実学的な要素っていうのも非常に重要だと思いますけれども、基本的には建築を愛する心っていうんですかね、そういう目先のことだけじゃなくて、建築というものを楽しむとか愛するとかいう、そういうものが自然に最終的にすばらしい評価につながるっていうふうには、非常に恥ずかしくて言えないようなことを平気で言ってしまうて申し訳ないんですけども、最後の言葉として述べたいと思います。以上です。

#### 【服部岑生】

どうもありがとうございました。「歴史的な価値を知っている建築設計」というような、そういう主張をしていただきました。ありがとうございました。これで前半の4名の先生方の講演を終わりにさせていただきたいと思えます。いろんな視点のご提案や現状でのいろんな教育改革が行われているわけですが、そういうものに対してもご意見をいただきました。後半の討論の参考事項にさせていただきたいと思えます。

ここで今、予定の時間より5分くらい超過したような時間で進行していますので、10分ほど休憩させていただきたいと思えます。その間に皆さん、講師の先生方、あるいは今後どういうテーマについて話してほしいかっていう質疑あるいは注文についてのアンケート、皆さんお手元にあると思えますので、書いていただいて、この受付のほうに持ってきていただきたいと思えます。それからちょっとあの休憩に入っていくんですが、本日は18時から建築計画委員会だけの話ですけども、計画系の懇親会を例年通りやることにしています。KKRホテルの金沢というところなんですけども、大手門大手堀前のホテルでございませう。この討論会の余韻を持って懇談したいと思えますので、是非いらっしやってください。

(休憩)

#### 【服部岑生】

…(不明)始めたいと思いますが、非常におもしろい話になると思われまして、ちょっと待っていただいて、JABEEとかUIAの話の経緯について、皆さんに情報発信しておきたいと思います。お手元にある資料のですね、47ページから、これは非常に乱暴なメモですが、今までのJABEE、UIA関係の「改革」という言葉を使っていますが、それに関係するいろんな問題に関する経緯がまとめてございます。で、長々と説明申し上げてしまうと時間をとってしまいますので、現状のところにはいきたくと思います。

このUIA、JABEEの問題は確かに世界的な建築関係の技術者資格というのを統一的にして、わが国の建設産業の立場から言うと、国際的な活躍を技術者がしていく資格を逆にまたそれに合わせていこうというような形の一つの経緯と捉えることができるわけですが、また一つ言い方によりますと、欧米諸国の戦略としてグローバルにわが国に攻めきってきている、というような言い方ももちろんできるわけで、それぞれ皆さんの考えでそのへんはご理解いただきたいと思います。現状ではですね、そうしたJABEE、UIA両方あるわけですが、その定義は47ページの真ん中に小さい字、定義って言いますか、内容の紹介が真ん中に小さい字で書いてございまして、ご存じない方もおられますのでここを見ていただきたいと思いますが、JABEEは英語圏で通用する技術者資格、建築技術者、とくに設計技術者の認定の参加は技術者資格というふうに捉えていただけるといいと思いますが、ただこれは日本の4年制の学部卒業を条件とする資格で、大学教育の内容により資格が得られるというふうになっています。日本建築家協会JIAとは直接は無関係でございます。国際的に通用する資格かどうか、あるいはまた日本の一級建築士との資格との関係は、もちろん出てくるでしょうけれども、明快ではございません。

もう一つのUIAのほうは、APECの技術者というのがはやっていますけれども、とばしまして、ここに書いてあるとおりこれは先ほど岡崎先生のご紹介にあったとおりでございまして、JIAが日本からの関係としては中心になっているものでございます。

それですね、現在のUIAのほうとJABEEのほうのそれぞれの教育に関する注文についてアウトラインをお話しますとですね、柏原先生の絵にもありましたが、まずJABEEのほうではですね、50ページのところに現状での教育の条件が一覧になっております。これは、全体の、JABEEというのは工学技術者全体に関する資格が問題になるわけですが、それは省いてございまして、建築関係だけの必要な要件が並べてあります。ちょっとここは理解が難しい点があるので詳しくお話しますとですね、日本の建築家教育というのは非常にホーリスティックになっているということから、そのホーリスティックな教育体系を維持するような資格条件になっているというのが、まず基本の考え方であると聞いております。それから、さらにそういう条件を前提としてですね、学部4年間の間に、まあ3年生、4年生の間で教育を受け持つ各大学によっては高度な教育を施したいというふうに考える、そういう教育目標の大学が出てくることが考えられるので、法律的なものに対してプラスの特定領域の高度な専門知識を与えてもいいというふうになっている組み立てになっています。で、それがゴシックで書いてある「1 学習教育目標で取り上げるべき知識能力」の下にある(1)と(2)それぞれに書き分けられています。ちょっとあの読んだほうがわかりやすいんで、全体を読みますと「建築学分野のプログラムは以下の(1)に示す建築学の専門知識能力を担保する具体的な学習教育目標が設定され、公開されていること。また以下の(2)に示す特定領域の少なくとも一つに関する知識能力を付加した学習教育目標を持つプログラムが設定され、公開されていること。建築学関連分野のプログラムにおいては、建築学分野と共通する領域に関しては、上記要件を準用し、独自の学習教育目標を別に設定する。」この但し書きはまた後で追加して説明しますが、今(1)と(2)のところ、(1)が要するにホーリスティックな条件に該当する専門知識能力でござ

います。「建築を芸術・技術・文化・社会・法律・経済などの多様な文脈と歴史やライフサイクルなどの時間的展開の中で理解し、建築学に関する幅広い専門的知識と総合的かつ体系的な識見をもち、建築と生活環境に関する企画・設計・生産・維持管理などができる基礎的能力」。ま、従来からの現行のわが国の教育というのは、これが非常に理念としてあったということで、こういうふうにはまず要件を定義しています。それから先ほど申し上げたプラスのほうですが、これは「建築に関わる特定領域の高度な専門的知識能力」というふうになっていて、これも続いて読みますと「建築企画・建築設計計画そして都市設計計画、住居建築環境・建築設備・建築構造・建築防災・建築材料・建築生産・建築運用保全・建築保存再生などの建築の特定領域に関するより専門的な知識。もしくは、ここが非常にポイントになるんですけども、「もしくは(1)の包括的知識をより発展させた知識を持ち、それを実務に適用しうる能力」というふうにか括弧には書かれています。で、これは、例えばここにいる皆さんにはほぼ該当するのは、建築設計計画とか、都市設計計画だとかあるいは建築運用保全、建築保存再生などの特定領域に該当すると思うんですが、こういう領域を伸ばすような教育をとろうとすればとってよろしい。しかしそうじゃなくて、まだ依然として3・4年生のときに総合的な知識をさらに発展させて教育をしていくというのであれば(2)というのではなくて(1)をさらに発展させた知識を教育してもいいというふうになっています。これが現在のJABEEの考え方ですが、これでJABEEの説明は終わりますが、もう一つ付け加えていきますとJABEEは確かにこうやって知識の条件を、知識や能力の条件を規定しているわけなんです、各大学が独自に教育目標を立てて、そして具体的な、あるいは個性的な教育の仕組みをつくるのが条件になっているということは言うまでもない前提でございます。その教育目標を明示して、そしてこういう今指定してあるような内容が含まれていれば、いずれの教育目標であろうと、その質が優れていればJABEEの認定が受けられる、というそういう仕組みになっているということです。

次にUNESCO、UIAの認定制度ですが、これはまだ確定しているわけじゃなくて、現状での段階でのあれですが、認定制度の中に重要なポイントは5章、基準の則細の5章のだけ、これ抜粋してございまして、お読みいただければいいんですが、52ページから54ページにかけて教育要件が具体的に書いてございます。建築都市設計というのが美・技術あるいは建築学会的にいえば、学術などという要素によって総合的に行われなければならないというような考えをわれわれ持っていると思うんですが、そういうことに関して多角的にリストになっています。安定したものではないということが問題のようなんですが、一応現在段階でのUIAが考えているものです。で、この場合、もう一つ重要なポイントが、学習年限、これは岡崎先生、重村先生のほうの話にもありましたけれども、学習年限が5年以上、それから教員団が設計の十分な指導ができる教員団が過半数いなくてはいいけない、あるいはさらにstudio教育は基本的な設計教育の前提になっている、というあたりは重要なポイントになります。これが54ページ、55ページあたりに出ております。それから認定の仕組みなどがもう一つ重要なポイントですが、ここでは省略してございまして。これらについてももう一つ言わずもがな前提ですが、教育年限が5年以上ということになってまして、当然日本の場合には大学院まで含めた教育年数が必要であるというふうには考えられていまして、昨日ありましたJABEEのシンポジウムでは、JABEEいとUIAとの関係というのを連続的に考えていけば、そこそこの付き合いでいずれのUIAの条件もクリアーできるようになるんじゃないかというような話がございました。ちょっと長くなりましたけれども、そういうJABEE、UIAの現状の報告でございます。

それでは最後の講演に入らせていただきますけれども、今お手元に質問用紙などお届けいただいた方もございますが、もしその他ございましたら、巡回いたしますのでお届けください。その間にわれわれどういふふうにご議論を組み立てたらよいか考えさせていただきますので。それでは伊東さん、お願いいたします。

【伊東豊雄】

よろしく申し上げます。司会をされている服部先生が私の先輩でございまして、「お前はいつも勝手なこ

とを言っているから今日は打たれに來い」ということで出てまいりました。

早速、厳しいパンチが最初からいただきまして、目が覚めておりますが、私はですね、アトリエ系の事務所でデザインをやっております、そういった意味では建築の教育に関しましては門外漢であります。ただし、一方で多少ですけれども、いくつかの大学の非常勤講師として設計製図の課題を担当させていただいております。その二つの立場があるわけですが、そのいずれの立場から申しましても教えている学生さんが、あるいは私の事務所に最近入ってくる若い人たちが全くリアリティがない。もっと極端に申しますと、2年くらいは何の役にも立たない。ほとんどの人がそうです。だいたい、私のところには修士課程を終わって入ってくる人が多いわけですが、そうすると大学で学部から含めておよそ6年間の教育を経てやって来るわけですから、ある意味では理想的な状態であるはずにもかかわらず、ほとんど役に立たない、役に立たないという言葉は非常に悪いですが、その役に立たないという意味は、建築が社会の中での存在であるという認識がない。つまり、それは同時に自分自身が社会の中の一人である、つまり社会人であるという自覚がないということとパラレルです。このことを言い換えますと、自分のことを言っているようなわけですけれども、例えば真っ白で抽象的な建築を描かせれば彼らは相当うまく描ける。それから透明な建築を造らせれば非常にうまく描ける。しかし、なぜ白いのか、なぜ抽象的に描くのか、なぜ透明なのかと問うと彼らは答えられない。せいぜい「自分が好きだから」としか言いません。ほとんどの人がそうです。つまりこのことは、コミュニケーションが成立しない、対話がないということです。

私のオフィスでは、自分で始めてから30年になりますけれども、この間、入ったばかりの若い人たちとも一緒に話をしながら、彼らのアイデアも十分に尊重しながら何かを造るということを心がけてきました。それは、私が学部を出てすぐに菊竹さんのオフィスに勤め始めたときに、菊竹さんがわれわれのような入りたての新人の意見をもっとも興味をもって聞いてくださった、ということに始まります。私自身がそのような立場にあったときも、自分が何か発言できるということに最大の意義を感じてきたわけですし、ずっとその後も大学へ行って教える時も、あるいは事務所で若い人を迎え入れて話をする時も、彼らからいちばん新しいアイデアが出てくるものだど期待し続けていたわけです。ところが、ここ数年、5年前と今を比べてもこの5年間の落ち込みようは激しい。ほとんどそこで何かを彼らから新しいアイデアが出てくるということを期待できる状況にはなくなってきています。

それで、なぜその話し合うということ私がこだわるのかということ、今日このペーパーに書かせていただいた問題であるわけです。つまり、近代建築を成立させてきた計画概念の三つの要件ということが書いてありまして、これはもうおそらく10年も20年も前に書かれた文章であろうと思いますし、柏原先生が言われたように、非常に古い計画学の概念であるかと思えます。つまり、目的を明確にし、かつ具体的にすることということ。それから手段の客観的な評価を可能にするということ。それから計画を実現する過程の予測可能であるということ。非常に端的に言えば、明快で客観的な合理性を前提とした建築が求められてきた、ということだと思います。別の言い方をすれば、機械のように機能的な建築が求められてきた、ということだと思います。そしてこれは確かにたいへん、計画の専門の方から言わせれば、今はそんな時代ではないよ、と言われるかもしれませんが、私にとりましては公共建築、公共施設の設計、日本の公共施設の設計に関わる環境に関して言えば、未だにこの三つの要件に象徴されるような明快で客観的、合理性を求める建築が完璧に支配している、と言えらると思っています。私が闘っている当面の目標は、このような建築であると言えるわけです。

で、なぜある意味ではとてもリーズナブルなはずのこの三つの要件に対して、私がなぜ刺激的に感じるかということがその前提に書いてあるわけですが、現代の、特に都市における生活が非常に複雑で多様なものになってきた。働くということとくつろぐということ、家でくつろぐというような区別が、ほとんど空間的な区分が成り立たなくなっているのではないかと。オフィスの環境も住宅のような環境がある意味求められておりますし、住居においても特にその子供さんを持たれた若い主婦のような方は、家で

仕事をしなくてはならない。つまり、オフィスと住居の間の一線というのはかなり曖昧になってきている。それからまた、パブリックな空間とプライベートな空間という空間的区分も非常に曖昧になってきている。これは言うまでもなく、コンピューターや携帯電話のような電子テクノロジーの浸透によってです。それと同時に昼の時間と夜の時間という、この時間による働いているか寝ているかというような区分もなくなってきている。そうすると、いったい住居というのはどのような空間なのか？ であるべきなのか？ あるいはオフィスはどのような空間であるべきなのか？ 図書館はどうなんだろう？ 美術館はどうなんだろう？ ということが完璧にわからなくなってきている、と言えると思います。特に、都市空間においても、建築においてもいわゆるゾーニングという線引きをするという作業が非常に難しくなっている。別の言い方をすれば、建築のいわゆるタイポロジーと言いますか、アーキタイプも曖昧にならざるを得ない時代になっています。したがって、いわゆるここでの計画という言葉が適切かどうか分かりませんが、大きくある建築を設計する時に、計画という段階、設計という段階、それから施工、利用し始めるというそんなに線形なものではないかもしれませんが、そのいわゆる最初の段階です、設計に入る段階です、そのオプティマムな回答を求めることはきわめて難しい。そうすると、設計をしながら、かつ解答をいつも求め続けながら設計し続けざるを得ないし、あるいは施工に入ってから回答を求め続けながら施工を続けなくてはならないような、そのような方法を受当なものとするやり方はないのだろうか？ ということが私が今求めている方法であって、そのようなことを考えたときに、いわゆる対話し続けながらものをつくっていくという従来の明快な建築にはなかった方法に頼らざるを得ないのではないのか？ つまり、結果よりはそのプロセスのほうがはるかに大きな意味を持つような建築にならざるを得ないのではないのか？ そういう建築の像を考えたときに、話せる人、話しながら何かを造ることが可能な人、このような若い人々が絶対的に必要なわけですね。そのような観点から、そうしたトレーニングが大学の教育で圧倒的に不足しているのでは、欠如しているのではないのかという印象を持ちます。つまり、建築的な体験よりも社会的な体験が求められる。先ほど重村さんが範例をいろいろ見せてくださったような海外でのスタジオ、あのようなところではかなり対話が行われているような印象がありますし、私自身も多少の経験はありますので、そのような対話、嫌というくらい、先生が嫌になるくらいの対話が日本ではやっぱり決定的に少ないのではないかな、と思います。ですから建築の表現を求めるというよりも、その思考の表現を求める。つまり、それも何を考えるか、如何に考えるかということが非常に重要な気がしています。私が今申し上げていることは、非常に観念的に受け取られるかもしれないんですけども、私とその数少ない大学の場でも、少しやり方を変えるだけでずいぶん変わってくるような気がするんですね。これは本当に小さな一つの例ですけども、昨年東北大で小さな課題を提出したときに、その最終提出物をですね、通常はA4パネル何枚、といったケースが多いんですが、それを本にしてください。それを本という形で提出を求めたわけですね。それを、最後の講評会を大学の中ではなくて、私の設計した仙台メディアテークというのがオープンしたばかりですから、そこで最後の講評会をやりまして、その本を提出するという形にするだけで、最後の結果よりはどのようにストーリーを造るかというようなことに一生懸命になる、それからまたその講評の場に一般の人が通りかかってちょっと立ちながら聞いていっただけで、彼らの語り口が変わってきます。それからまたそこにおいて、私が講評する自分自身の言葉も変わってきます。そのようにちょっと場所を開いていっただけでも、結果、求めるものを変えるだけでもずいぶん変わってくるのではないのか。それからまた、これは自治体の人であるとか、あるいはクライアントになるような人であるとか、そういう人が講評の場に来てくださる。つまり建築の専門外の人が、設計の専門外の人が来てくださるだけでも、学生が変わるといってもその先生が変わるような気がするんですね。やっぱり設計というのは、その経験ということの差は、その学生と先生との間に圧倒的な差はあると思いますけれども、ある一つのアイデアを提案して、それを何かに作り上げていくというプロセスでは、先生のほうが優秀であるとは限らない。私の事務所でも私が優秀であるとは限らないわけで、全く同じポジションに立ってそのことを考えられる

か。そのような何しろ僕は話し合える人をどうやって送り出して下さるかということに最大の興味があります。

たいへん勝手なことを言わせていただきました。

#### 【服部岑生】

どうもありがとうございました。それでは、今の伊東先生の話も含めまして、パネラーの皆さんで改めて討論の場に行きたいと思えます。先生方恐れ入りますが壇上のほうにお座りいただきますようお願いいたします。それから、質疑のある方は今、担当の者が回りますので、回収させていただきたいと思えます。討論の後半のほうで、それを参考に討論を組み立てさせていただきたいと思えます。質疑がおありの方がおられますでしょうか？ 挙手いただければ、取りに伺いますので。おられませんか？ ずっと巡回しますので、そっと挙げてください。恐れ入ります。

それでは、討論を始めさせていただきます。先ほどまでそれぞれおもしろい議論を展開していただきました。それぞれはですね、設計教育には必ずしも向いていないものもありますけれども、基本的に計画系分野が生み出す一つの最大の職能であります設計分野に向かったご提案がいくつか入っていたと思えます。伊東さんもその関係です、自分ところに来る所員、あるいは自分の設計の今後の新しい形、これからの新しい形を意識した時にどのような学生が必要かということ力を説いていただきました。いずれも計画系教育が今後目指すべきもの、その課題に関するものでございました。そこで、伊東さん、最初に柏原先生が伊東さんにジャブを与えたわけですけれども、伊東さんのほうも柏原先生のほうに対して何かジャブを出したような感じがいたしますので、一つ柏原さんというのは今度最後にしまして、伊東さん以外の先生方、順々にですね、伊東さんへの感想も含めて今後の新しい教育のあり方ということについて、もう一度議論を展開していただけたらいいと思えます。羽生先生からお願いいたします。

#### 【羽生修二】

まず、伊東先生のお話を伺っていくつかポイントに従ってお話をしたいと思えます。近代の建築計画学、この計画学の先生方もたくさんいらっしゃってますんで、批判的なことはあまり言えないところなんですけれども、実は、歴史意匠のほうからしても、計画学っていうのが果たしていい建築を生み出しているのかな、という疑問が、私もですけれども、私の習った先生方、歴史の先生方がいつもおっしゃっていたことで、今改めてですね、伊東先生のお話を伺って、現代の計画学がそうかどうかわかりませんけれども、かつてビルディングタイプスで分けた、いわゆる計画学の授業というのがいい建築っていうか、非常に創造的な建築物を生みだすためにかなり、かえって妨げているんじゃないかっていう疑問が、実は私も持っています。その研究としての歴史は非常に重要なことを担ってきたと思えますけれども、そのデータ主義って言うかデータ偏重主義にしまったことが、一つの問題になったんじゃないかな、というふうに関今、私も考えております。

それからもう一つは、学生のコミュニケーションのなさっていうのは、学生って言うか今の若い建築家志望の人たちがコミュニケーション不足であるということが、非常に教育をしている立場として本当に常々感じていることで、そのコミュニケーションをどうやって深めたらいいか、それは私も重村先生と同じようになるべくフィールドワークというのを非常に重視してそういう住民の人たちとの対話、社会の人たちとのコミュニケーションを調査をする中で学生の中に帯らしてほしいってということも、教育の一つだということで非常に重要に感じております。

そして、最後に講評に対して一般の人たちとの学生との交流っていうのを、実は今日のお話の中では紹介できなかったんですけど、私の書いた今回の報告書の最後に、小田原市の街づくりに対する提案っていうふうなものを大学院の授業で、歴史意匠と建築計画と都市計画の専任の先生たちが合同授業、合併授業として実は昨年秋に実施してですね、そして小田原市で発表し、住民の方々、地元の行政の方々の中で大学院生が発表して喧々諤々の、あまりにも興奮して学生が泣き出すくらいに、市民の人たちと非常に

盛り上がった講評会をやることができました。まさに、先生たちがすごいショックなことが多かったんですけども、学生はやはりいい経験だったと思いますし、そういうことをやっぱり大学院の授業の中にやっぱり多くとり入れて、少しでも社会性のある教育を推進したらいいな、というふうに考えております。

先生のおっしゃった、お話されたポイントにほとんどが賛成ということで、あまり議論にならないかなとは思いますが、感想として述べさせていただきます。以上です。

#### 【服部 岑生】

ありがとうございました。スピーカーのトーンが似てくるのが気に入らないけれどもしょうがない。なんかいいことだけをしているというふうにだんだんなくなってこないで、一つ乱暴なものを次の方たちにお願ひいたします。それからですね、会場のほうから長澤先生、東大の長澤先生からご意見をいただいております(注4)。ものすごく具体的な医療の言葉では何ていうんですか？ 対症療法と根治療法の具体的な事例をお願いします。というふうに書いてありますんで、ラジカルでありかつコンクリートなご意見を追加していただくようお願いいたします。重村さんにちょうどあたったんで、よろしくお願ひいたします。

#### 【重村 力】

なんか、ラジカルなことを求められちゃっているんですけども。黒板にちょっと字を書かせてください。

伊東先生のお話を聞いていて思いついたんですが、今僕が書いたのは、上はですねアーティスティック (artistic) ですよ。芸術家的というか。で、下はオーティスティック (autistic) っていうんですよ。オーティスティックってね、自閉症的って言うんですよ。それで、その僕と非常に親しくしているルシアン・クロール (Lucien Kroll) さんという、参加型の建築家のフィールドワークの代表選手みたいなベルギー在住のルクセンブルク人で、主にフランスやオランダで仕事をしている人ですけども、そのクロールさんがよく自分の原稿に「どうも世の中最近、autistic だ」というふうによくとですね、すぐ artistic だというふうにはですね、ミスプリントされるっていうんですよ。で、今、伊東先生がおっしゃっていたような問題は、世の中の子供とかですね、社会の状況がものすごくオーティスティックになっている、ということが非常に問題なわけで、このオーティスティックな要因っていうのはね、建築教育よりはもうちょっと違うところに、家庭環境とかですね、そのあるいは都市空間とかそういうところに非常に問題があるんじゃないかと思ったり、特にその都市空間ということを考えていきますと、私なんか問題にしているような多自然な環境を含んだ農村空間の豊かさとか、そういうものは絶対オーティスティックな人間は造らないなと思うわけで、ですからそういう意味でも職能についてどういう空間をわれわれが造っていくかっていうことに非常に関係はしているんですけど、一般的にそのオーティスティックになってしまっているわけですよ。で、それではコミュニケーターとしての建築の仕事はできないわけで、だから建築家は建築教育がもっとそうしなきゃいけない、っていうのはよくわかるわけです。しかしですね、そのこの間の建築作品の展開っていうのを見てきますと、例えば 60 年代の末くらいにはですね、建築がまだ社会化していく時代でありまして、非常に都市的な関心であるとか、あるいは時間の中での建築とか、そういうものに非常に関心が深かったわけです。工業主義的であったかどうかという、エコロジカルかということ、みんなもうごっちゃにして考えれば、非常に社会的な関心の中で建築が考えられたんですね。建築デザインが、ですよ。建築のデザインそのものが、社会的な関心の中で考えられたわけです。そういう風潮の中で、例えばデコレーションへの禁止とかですね、そういうものがしんどくなってきてですね、それで “Less is bore.” とかそういう言葉もでてきて、ポスト・モダニズムのようなものが出てきて、で、風化していったって 80 年代くらいから妙に建築作品そのものがオーティスティックになっていったわけです。ですから、そういうものを目指して、アーティスティックな建築家のところへ行くアーティスティックな学生はすごくオーティスティックになっているわけですよ。そういうこと、私は非常に思いますんで、そういう意味でもどう申し上げていいかわかりませんが、われわれがもうちょっと interactive で

stimulative な授業をやっていかなくちやいけないし、そういう意味ではスタジオ教育っていうのはすごくいいだろうと思うし、それからもっと外へ人を出していく、あるいはワークショップをやっていくとか、具体的なものに触れさせるとか、そういうことは非常に大事だと思います。

それから単純な、僕は今日は教育論のあれだと思っていますから、一つはトコロ天式ですね、輪切りところてん、偏差値トコロ天式の大学は改める必要がある。早い話が3分の1くらいはこういうことで選んで、3分の1くらいはこういうことで選んで、3分の1くらいはこういうことで選ぶ。とかですね、そういう全然違う基準で学生が選んである。違う集団が来ているとか。今私のところなんかは3年次編入ですごくおもしろい学生がいっぱい入ってくるんですけども、そのような非常に多様な主体を最初からクラスをそういうふうにすると。アメリカがおもしろいのはですね、いろいろおもしろいことはありますけれども、その人間集団が多様だっている、それがものすごくおもしろいわけですよ。

もう一個ややこしいのはですね、昨日懇親会場で僕議論、いろんなところで議論していますけれども、懇親会場で議論していたんですけども、要するになんだかんだ建築家が優秀だったらですね、向こうの建築家が組んでくれて資格なんかがつくんだから、そんなことはどうでもいいじゃないか。と言う鹿島建設の先生がいたんですけども、僕はそういう発言は許さない。つまり、**opportunity** というものに関してはやっぱり絶対イコールじゃないといけなと思うんですね。その発想が浸透していないところが、僕らがアメリカに負けているし、それからグローバリズムなんて言葉にやられちゃうわけですよ。グローバリズムっていうのは、ものすごく柏原先生が言うようにやばいもんですけれども、しかしイコールな **opportunity** を目指すと、そういう **aggressive** な人たちからなる社会でもっとオープンマインドにやっていくようなですね、そういうふうにはいかなくちやいけない。で、多少建築の表現主体も自分の表現がオーティスティックにならないようにですね、学生に悪い影響を与えないように気をつけなくちやいかなんと思う次第です。

【服部岑生】

ありがとうございました。とてもラディカルになってきたような印象がありました。そのほかの先生方もきっと反応されたんじゃないかと思えますんで、よろしくいろいろとお願いいたします。北原先生お願いいたします。

【北原理雄】

はい、あの根がおとなしいもんですから、あんまりラディカルにならないんじゃないかという気はするんですけども…。

伊東さんが東北大でやられた演習の話があったんで、千葉大でやっている演習設計課題というか、それをご紹介を二つほどさせていただきたいと思います。一つは、建築学科の、いわゆる今名前が変わっているんですけども、建築学科の3年生、もう一つは、今私が所属している都市環境システム学科の社会人クラスの3年生の課題です。どちらも現場でやる、ということで課題の最初の出題を対象地区で、ここ数年固定しているんですが、やっています。地区内の、建築の方は出題のときは集会所をお借りして、まちづくり協議会の方と、それからまちづくりセンターの方に来ていただいて、これまでどういうことをやってきたか、どういうことで悩んでいるかという話を聞いて、それから小学生5・6年生と一緒に街歩きをして、その中から課題を見つけて、基本的には、その地区の修復型の改善提案を、住宅を中心にしてさせる、と。段階的にどういうふう修復していくか、改善していくかというプロセスを示す。その発表会は地区内の小学校の体育館を借りて、そこでプレゼンテーションをします。これは一般の人たちに公開して来ていただいて、投票、人気投票をします。投票の票数が多かった学生の作品をその場で、全部貼り出すんですが、順番が前後しますが、グループ制作です。で、全部貼り出すんですが、オーラルなプレゼンテーションが票が多かったグループだけさせてあげるっていうのをやっています。そこで、学生たちはそれまでとは違う課題の出し方で非常に興奮するということと、大学でも講評会をやるんですが、大学の講評会

で話すことと現地で話すこととは、言葉が、言語が変わります。専門用語と日常語のギャップの話がどっか出なかったかな、午前中の話だったかもしれませんが、話す言葉が場所によって変わる。多重人格的になってきているのかもしれませんが、それから評価される作品が大学の講評会の時に高い点数がつくものと、地元でやった時に票がたくさん入るものは違う。これは、大学の教官、いわゆる設計教官がいかにか、私も含めて、偏ったものさしを持っているかということと、住民が何を求めているか。どちらがいいと言うことではなくて、そういう違う眼差しが社会には存在するということが実感としてわかるということで、設計のレベルそのものはそれほど高いというふうには必ずしも言えないんですが、エキサイティングな課題になっています。

社会人クラスの方は、これはどちらかという設計というよりももう少しプランニングっていうか、ある種のコーディネーションをする能力を高めるっていうことなんですが、これも出題を地区の集会所をお借りして、街づくりをしてきた地区の組織の方たちのお話を聞いて、街の中で自分なりに課題を見つけ出して、中間発表を現地ですて、その反応によって、最終的な成果を出すということなんですが、最近、これもグループ作業でやっているんですけども、小さなものしかもちろんできないんですが、小さな仕掛けを現実リアルサイズで作ってそれを街の中に入れる、と。それが街の人たちの生活にどういう形で反映するかという、ある種の仕掛け作り、インスタレーションをしてそのプロセスを作品としてまとめて発表するというので、これも一般の人たちにある種の受け狙いみたいなところもあるんですが、非常におもしろい仕掛けが出てきて、発表会で白熱する部分もあるんですが、笑いにも包まれているということで、なかなか、社会人ということもあるんですけども、充実した課題になっています。

現場に出ることが、重村さんなんかのいわゆる studio 型の、欧米の正統的な現場へ出るというやり方もあるけれども、日本の現状の中では、要するにこの汚い都市風景の中では、もう少しゲリラ的なやり方もあるのかなという気がしています。ただ、そういうことをやる時に、現在の大学の体制は必ずしもそれに対応していません。例えば、その為に必要な資金は、私は国立大学ですが、校費からは一銭も出せません。それから、事故が起こったとき、一応保険には入っていますが、幸い大きな事故は今までは起こっていないんですが、大きな事故が起こったときは多分私の首がかかるということだと思っています。

それから、こういった住民参加型のワークショップ型の演習っていうのは、都市計画部門では最近増えているんですが、そういうのを見ていて若干危険だな、と思うのは、ある種の洗脳になる可能性がある。要するに、いわゆる教祖が生まれつつある。誰のこと言っているかわかる人はわかると思うけれども...。そういうふうになんかカルト集団みたいな形にもっていったら、まずいという気がしています。そういう意味で、重村さんとこぐらいがギリギリだと思うんです。これ以上いったら危ないという気がしています。

【服部岑生】

それくらいにしておきますか？ ありがとうございます。それでは、柏原先生いかがでしょうか？

【柏原士郎】

今の最後のお話が、私、いちばんかなり重要なポイントだと思うんですけども、まず伊東先生に私最初に申し上げたんですけども、今のお話を聞きまして、特に反論といいますか、伊東先生と意見が違うということはないんですね。非常に私も同感で、特に学生がしゃべらないというのは本当に切実に感じているわけですね。しかし、これが建築教育の問題とか、アトリエ教育をやれば解決するとかそういう問題じゃなくて、これはまさに重村先生が言われたみたいな社会の全体の動きがそうなるんで、もっと根本的に考え直さなければ、問題が背景にあって、それが後ずっと建築のそういうところまで響いてきているというふうに思います。私はいちばん言いたいのは、何と言っても、何べんも繰り返して言いますが、建築というものがどういう建築がいい建築かということが、現在の社会では非常に曖昧になってきていると言いますが、評価が難しい時代になってきていると思うんです。結局、これは教育をやっている

場合もですね、学生が課題を提出した場合に、優秀な学生ほど先ほどの教祖の影響といいますか、そういうものを非常に受けていて、ある意味ではその建築家と全く変わらないような作品をもって来る、と。それはある意味では、ある社会、建築のある社会でたいへん評価されているものをもって来る、と。そういうものに対して、それに対してそれはおかしいんだ、というサイドの迫力といいますか、絶対そういうものではないんだと言うだけのものをなかなか持ち得ないんだではないか。もう社会全体がそういうふうに動いていますから、そうは言ってもこれは何々賞をもらったとかですね、何だとかですね、いろいろそういうわれわれが言うよりも非常に客観的な評価を出された時に、果たしてそれを打ち破るだけのものを持ちえるかということ、たいへん難しい時代になっていると思いますね。

それで、私は今回建築学会がこういうことをやっているということで、学会の役割というのは私はすごくあると思うんですね。例えば、学会がやはりホーリスティックな場であるということであれば、建築というものに対して、こういう建築がよいんだ、ということをやったり指し示す組織としてはいちばん中立的な、しかもいろいろな分野の方々の意見が反映できる、ある意味では唯一の組織ではないかと思うんですね。ところが、学会自身が建築のそういう評価というものに対して、非常に立場が曖昧であると。具体的に言うと、これは建築学会賞の作品賞というのがありますが、果たしてあれを受賞した作品が果たしているかどうかということの議論というのは私はいつも提案したいんですけども、やはり見直す必要があるんじゃないか？ というのは、たいへん優れた作品も非常に多いんですけども、中にはたいへん問題のあるものが受賞していると。逆に例えば BCS 賞なんかの方が、ある意味では非常に堅実にそれなりの水準のものを造っていると。ところが、学生はどちらかということそういうものはあまりおもしろくない。非常にある意味では先端的といいますか、前衛的といいますか、そういうものがいいんだというふうに考えると。何もこれは根本的に間違っているというわけではないんですけども、そのそのどういう考え方でそれを考えていくか、というあたりがまだ曖昧にされてる部分が非常に多いと思うんですね。ですから私は、やはりそういう正当な建築の評価というのをやはり基礎に据えなかったら、教育というものはその上に成り立つものですから、例えばアトリエ教育をやったとしても、アトリエ教育をやる時に前提となるそういうものに対する考え方が曖昧であれば、やはりそれは成り立たないというふうに思います。

それともう一つ、先ほどのお話の中で日本の街並みといいますか、景観がたいへん美しくないというかそういうお話がございましたが、これは私もそのとおりだと思いますけれども、これは基本的にはですね、いわゆる一般人も含めてですね、いわゆる環境とか建築に対する関心といいますか、これはある意味では非常に低いんじゃないかというふうに思います。特に、例えば自治体のお話が伊東先生からもありましたが、自治体のある意味では発注者サイドといいますか、ものづくりに携わる人たちが優れた方もおられますけれども、ある意味では計画的なと言いますか、建築的な非常に深いセンスを、趣向力を持った方がおられないところが非常に多くて、ある意味では非常にマニュアル的な発注の仕方をする。場合によっては非常に間違った設計者を選定する、ということで、ある意味ではその部分の発注者の問題というのが私は非常に大きいんじゃないか。そのときに、このいわゆる計画系の立場から言いますと、当然設計者に進む人もいますけれども、やはりそういう発注者サイドの、いわゆるちゃんとした認識を持った人がそこに進み、しかも街づくりなり建築の作り方に貢献をする、という分野が非常に広くあるんじゃないか。例えば、例えば1割くらいしか設計に進まない、残りはどこに行くんだといった時に、先ほども申し上げましたように、やはりそういう建築を生み出すほうの発注者サイドの仕事に就く人がいていいんじゃないか、というようなことを感じております。以上です。

【服部岑生】

ありがとうございます。だんだん、学会の役割ということまで話が広がってきて、われわれが協議している内容の幅が出てきたと思います。岡崎先生に一つご感想をお願いします。

【岡崎甚幸】

司会者があんまりこんなこと言ったらいかんのですけど、伊東先生の話はたいへん興味のある話で、私もいつも実感しているのは設計演習ですね。で、ところが、学生だけではなくて教官の中にもそういう人がたくさんいる、というふうに最近感じているわけですね。例えば、これはいいとか、才能があるとかいうことで終わってしまう講評が非常に多いような気がするんです。これには非常に大きな原因があると思うんですが、大きな問題としてはやはり感性と理性。感性と理性のときに、理性のところ言葉、作品がいいと思ったときにそれを言葉に表せない話ですね。それから、計画学というのは数値で、要するに科学に乗かってモデル化して操作する、という話ですから、今のような物事が不確かなことがたくさん出てくるときには、科学では答えは出ないと思うんですね。私はたまたま箱庭療法に似たようなことで河合隼雄先生の本をたくさん読んでおりますが、『ユング心理学入門』という本の中に非常に明快に書いておられますけれども、科学というのは自己をできるだけ殺して客観化してモデルをつくるわけですから、自己を殺す学問をずっと計画学が...(不明)ても、これはそういう初めての個人の体験、感性を言葉にすることはできないと思うんですね。むしろセラピストとしての療法の場で、患者の悩みを対話で解きほぐすという、そこには言葉が必要なわけですね。で、その言葉はおそらく建築の対話と同じことであると、私はずっと思っているんですけれども、その言葉をいかにして作り出すかという学問が必要だろうと思うわけです。それは、私はたまたま恩師は増田先生ですけれども、建築歴史意匠の中の建築論の分野では、それはずっと昔からやってきている話でして、やはり問題を言葉にするトレーニングを教官がしないと、いくら経っても学生はそのままで、社会が悪いのではなくて、これはあえて柏原先生に申し上げたいんですが、教官が悪いんじゃないかという話をお返ししたいと思います。

それで、そうしたら多分、設計教育に言葉の問題を作り上げる、設計を言葉で表す体系を作り上げる研究者は果たして要るんでしょうか、要らないんでしょうか？ むしろそのことを先生方にお聞きしたいと思うんですが、いかがなものでしょう？

【服部岑生】

修羅場にはなってほしい、と思うんですけど、伊東さん、なんかご意見ありますか？

【伊東豊雄】

あんまり修羅場にならなくて、嬉しいなと思っっているんですが。いくつか今興味あるお話が生まれて、柏原先生が最後におっしゃった、地方自治体の建築を発注する人の側にもっと計画者が、優秀な計画者が行ってほしいというのは本当に痛感します。よく聞く話ですけども、地方の大学で建築学科を持っている大学がある県とない県ではそこにできる建築の質が猛烈に違うという話を聞きますけれども、特に地方都市に行きますと、ほとんど建築の発注に関して、はっきりとしたポリシーを持たないまま発注されている、というケースが非常に多いように思うんですね。で、こういうところに計画系の人たちがもっともっと浸透して行ってほしい。それは、建築家を養成するよりもはるかに早く、日本の建築の質をよくする早道であるという気がいたします。

それが一つと、それから、教官が結構オーティステックじゃないか、という話なんですけれども、私が建築家もその現場に行って、役所の人、その住民等ともっと対話をするべきだと申しあげましたし、そう思っておりますが、正直なところ僕自身はあんまりそういうことは好きではない。そして、そこに建築家よりもある実践的な計画学者のこれからの一つの役割というのがあるような気がしているんですね。実際に、私などはそういう方にずいぶん助けられておりますし、プロデューサーという言葉がちょっと違うような気もしますが、発注者と建築家と住民との中間にいるようなその3者の間を取り持ってくださいるような方ですが、そういう計画学者の方がもっと、もっと出てきてくださると非常にわれわれは、変な建築を造らなくなるんじゃないか。つまり、皆さんが批判されるような表現主義的な何か独りよがりの建築を造らなくなる。これもまた非常に有効な方法である、と思っております。

それからもう一つは、われわれのところによくポートフォリオを持ってみんな面接に来るんですが、私

はこれをもう信用しないということにしました。柏原先生がおっしゃっている優秀な学生ほど、何々のコンペティションに入りました、というような作品を並べてくるわけですね。それを見ておきますと、非常に表現という意味では優れているわけですが、これが何の役にも立たない。特に、いわゆるアイデアコンペが日本ではたくさんあって、そこで優秀な賞を獲っている人は、学生たちによると、彼らは彼らの間で一種のタレントのようになっているそうですけれども、あのコンペにも入った、このコンペにも入った...と。しかし、そういう学生がいかに信用ならないか。これは私もそういうコンペティションの審査を時々やっておりますので、かなり私も責任があるし、考え直さなくてはならないと最近思っておりますが、どうやってその学生を採用するということを決めたいかということは今、一生懸命考えているところなんです。その卒業設計というの、そういう意味ではあんまり役に立たないと、言ったら怒られそうですけれども、あまり信用できないものではないかと思っております。

#### 【服部 岑生】

幅広い職能のイメージ、建築計画が貢献できるような職能のイメージを一つ一つ言っていただきましたし、また学生の本質を理解する方法を経験的に得られたようなので、それみたいへん教官の皆さんには参考になったのかもしれない。

さて、ここで皆さんにひとあたりご意見をいただきましたんで、実はこれで第二段階にこれに入っていきたいんですが、さきほど九州の友清先生からご注意をいただいたんですけれども、5時より延びるとバスに乗れなくなって建築計画懇親会に軒並み遅れるだろう、というご注意をいただいたんで、ぴったし終わるかそれよりちょっと前に終わらせていただきたいと思うんですね。ただ、5時半までであるというのは僕もよく知っているんだけど、昨日5時20分くらいの乗ろうと思ったら乗れなかったでしょ？ タクシーまで乗れないし、6時から始まる...。5時前にぴったしおしまいさせていただきます。

それで、会場からもう一方ご意見をいただいておりますが、われわれここにいる連中はですね、伊東さんを除いて大学の身内ばかりなんで、一つ会場にですね、実はJIAの前会長の村尾さんとですね、それからBCSの関係でJABEEの審査委員にもなっている、清水建設の榊原さんの二人が来ておられます。それで、事前にコメントをいただくようお願いしてあるんです。それから、元先生で、計画学の創設者でもあると考えられます鈴木成文先生にもコメントをお願いしてありますんで、外部評価を今までのメンバーは受けたいと思いますが、新しいこれからの教育のあり方について、それから鈴木先生には計画学というものも持っている可能性と限界みたいなことをそれぞれ皆さんが言われましたんで、その辺も含めてお話を伺いたいと思いますが、時間のないことで皆さんにご意見を伺いながらという形もあるんですが、順々にお願いさせていただきたいと思っております。

いちばん最初に、今学生の問題が出たんで、榊原さんからはその学生の持っている問題について私、何度もご注意もいただいたし、いろいろ意見をいただいたんで、最初に榊原さんをお願いしてよろしいでしょうか？

#### 【榊原 潤】

榊原と申します。服部先生にお願いされた覚えはないんですけれども、ご指名をいただきましたんで、感想を述べさせていただきます。

私は企業に勤めてまして、建設業界の方は今非常に調子がよくないんですね。受注も減って、人も減らして、という中で、採用がほとんどできない。12年くらい前が最盛期だったんですけれども10分の1とは言いませんが、それくらいの採用数になっているんですね。私の非常な疑問は、果たして皆さんちゃんと就職できているのかな、というのが疑問であります。後ろの服部先生のアンケートを見ますと、皆さんかなりの方が就職されているので、よかったな、と思うんですが、パネラーの先生方は皆さんご高名な先生方ですね、計画とか、あるいは設計学のうちからの悩みとか、それに対する自らの考えをいろいろご説明いただいて私もそれぞれ立場の違われる先生のご意見もよく理解いたしました。ただ、何ていいま

すか、本当にじゃあ、データを持ち合わせていないんですが、私の直感で言いますと、大学に、建築に入ればですね、半分くらいの方は設計がしくて入るんじゃないかな、と思うんですね。最後、外へ出て行ってじゃあどれだけの方がその仕事に就けるか、というんですね、相当限られるのではないかな、ということで、設計者を育てるためにどうこう、設計者を育てるといわけではないんでしょうけども、設計というものに対してどういうアプローチをしてというお話はたいへんよくわかるんですが、じゃあそこからこぼれていく人をですね、どういうふうにして社会に送り出そうとされているのかな。そのへんが過保護に、なにもルールを敷いて学生が就職するところまで見届ける必要はさらさらないと思うんですが、何かいけば本流のところはきちっとされていると思うんですけども、他の分野ですね、他の分野に対して、意思を持ってですね、学生を育てるといのか、そういうことはどうもあまり明快に私は感じ取れないんですね。

そのへんのところを含めてですね、最後、柏原先生とそれから伊東先生がおっしゃったんですかね、発注者側という話がありましたけれども、私もそれはたいへん感じているんですね。で、私は民間の会社ですから民間の仕事しかありませんし、数年前までは設計をしておりました。やはり相手側に、発注側にそういうことがよく理解できる人といのか、考えがわかった人がおればたいへんいいんじゃないかと常々思っておりますけれども、そっち方面に人を送り込むことを、もう少し大学としてやっていく、やっていくというとおかしいですけども、方針をもって、意図をもってやられてもいいんじゃないかな、という気がするんですね。これから PFI とか発注形態も変わってきて、建築をどうやって実現させていくかということまでですね、話が広がりが出てきているんですけども、その中で建築のものづくりのところだけに、設計者がとどまっているのでは、まさに先ほどご指摘があったようなところがですね、なかなか改善していかないと思いますんで、是非計画系の人々の進路を広げるという意味の、本業のところは皆さん当然やられるところなんでしょうけれども、それにプラスするところの分野がわれわれの身近な会社の中でもいろいろとありますんで、是非そういうところにも目を向けていただければいいのかな、と思っております。以上です。

【服部岑生】

どうもありがとうございます。もし、お返事したい方がおられると思いますが、ちょっとご勘弁ください。皆さん、お願いした方にひとあたりご意見をいただいてからにしたいと思っております。じゃ、村尾さんお願いします。

【村尾成文】

座ったままで失礼いたします。今の榊原さんのお話、たいへん建築界全体としては大事なことだと思っているんですね。発注者側に、ということだけではなくて、建築というのは実学でございます。実学のマーケットが大幅に縮小していくわけでございます。その中に計画系の学生がいるわけでありまして。これが、十数年前の状態に戻るといふふうには考えないほうがいいと私は思っております。発注者支援も大事でございますが、三千ある自治体のうち常時建築の発注ができる、あるいはそういう必要がある自治体はそんなに多くございません。そういうところが人を職員として抱えられるかということも大きな問題なんです。こういうことを全体として建築界が、構築し直しが必要ではないか、と今のお話を伺っていて感じました。

実は今日私が呼ばれたのはそういうことではなくて、お手元(注1)の39ページに書いたようなことだと思っております。教育は教育であって、資格は資格だという論の立て方もあるわけですが、それから日本の戦後50年間の20世紀後半の国土都市建築造りが、最終的に経済力に見合ったものになっていないんじゃないか、というのが今日の午前中の都市計画の教育のお話を伺っていても、今日のお話を伺っていても共通の認識ではないかということなんですね。その中で資格のグローバル化、国際化という問題が発生してきたわけです。これは私の記憶ですと、確か8年前にUIAの理事会を東京でやりました。

そのときに、資格に関する特別委員会の設立が理事会で決まったと記憶しております。したがって、もう10年近い、実はそれに多少先行する期間がありますから10年近い月日が流れているわけでありまして、建築家協会はUIAのメンバーでございますので、随時日本の建築界に情報としてオープンにお出しをしてきました。行政も含めて出してきました。当初は、かなり疑いの目をもって聞く方が非常に多かったと私は記憶しております。資格と教育に関しましては、いろんな立場の団体、方たちが関わりを持っておりまして、それぞれの立場の方で受け止め方が違うんでありますが、現時点では教育の議論が私はいちばん先に出始めたのではないかと、とたいへん嬉しく感じているわけでありまして、UIAが5年と決めてそれに倣う必要はないとか、いろんなかなり感情的な反応もありますが、UIAはもともと最低5年は必要であると言っている話でありまして、それぞれの国がそれぞれの歴史を持って制度をつくっていることも当然であるという中で議論が進んでいるわけでありまして、実は、私どもはいろんな議論をあちこちとさせていただく中で、教育がいちばんたいへんなんじゃないか、と思っておりまして。私よりもこのことにいちばん熱意を持ってやっておりました私の二代前の会長の鬼頭さんという方がおられますが、この方がいつもそういうことをおっしゃっておられました。それから比べますと、様変わりでございます、むしろ資格のほうがどうなるんだという議論に重点がいかないといけない状態ではないかと思っております。現在資格のほうは、学会も含めて関係5団体で建築設計教育資格なんかかかるとか...名前は忘れましたが、そういう意見交換の場を持っているような意見交換をしております。ただ、そこでまだ統一的に制度を変えるという合意までは至っておりません。それぞれがそれぞれのある提案を持っております。ご存知の方も多いかと思いますが、建築士会連合会は一級建築士の制度の上に、自主認定で専攻建築士制度というのを乗せたいという提案をしております。これから具体的な検討が始まりますが、自主認定であるということは制度化しない、できないということになるわけでありまして、多分これでは国際的な相互承認の資格にはつながらないのではないかと思っておりますが、士会連合会当事者がまず在来の一級建築士ではもうだめであるという認識に到達したのはたいへん大きいと思っております。

それから建築士法上、建築士事務所を設立しないと業ができないことになっておりますが、この事務所協会の連合組織、全国組織がございます。ここもある提案をしております、管理建築士制度というのがあるんですけども、この管理建築士制度の条件を厳しくして、しかも複数化していくという提案をしております。これも制度上なかなか難しい話でございます。それから私ども建築家協会は、いろんな経過から国際的なレベルで提案されている建築家の制度が日本に実現できないか、という提案をしております。

そんなことで、いろんな議論が進んでおりますが、私はとにかくある方向に向かってそれぞれが動き出したということは、数年前はとても想像できない状態でございます。やっと開発途上国タイプから脱出していく建築界になるのかな、という感じで見ているわけでございます。

それに関連してですね、実は建築士制度というのは昭和25年につくられました。昭和25年には、今、建築基準法というのがいちばん基本になっておりますが、これができてきて、同時に国会で成立しておりますが、建築士制度というのは、建築基準法で求める内容を担保するための設計監理を行う技術者の資格を定めた。これは、建築士法第一条に書いてあることでございます。技術者の資格って書いてあるんですね。内容は建築家のカテゴリーに入るのもかなり含まれているんですけども、基本は技術者の資格であります。この背景はやはり建築基準法にあるわけでありまして、建築基準法は、これも1条を皆さんお読みになったことがあると思いますが、「建築物の敷地・構造・設備および用途に関する最低の基準を定める」と書いてある。これはいい加減に書いてあることではない「最低」なんですね。決して望ましい基準を定めているのではないのであります。これは昭和25年という時代、おそらく今日いらしている方は私より若い方が多いので、ほとんどご存じないと思いますが、おそらく今の中国とかアジアの近代化に向かって浮上してきている国の状態に比べたら、もっとひどい状態でありました。それから、戦争遂行のために国土が荒れ果てておりまして、たいへんな災害多発国だったわけでありまして、そういう中で制度が成立してい

る、ということでありませぬ。この最低の基準というのはいずれも、数年前の建築基準法の抜本改正で、この読み直しがされるんじゃないかと期待したんですが、結局1条には手がつきませんでした。この1条に手がつかなかったのは、当時の建設省の中心の方に私は伺ったんですが、これは憲法論議をしないと変えられないんだそうであります。憲法の中で関わりがあるのは29条の財産権の不可侵権の項目なはずなんです。経済性をベースにした不可侵性を憲法で決めているところから、ちょっと過激な言い方をすると、50年後の日本の都市や建築の状態が当然のように帰結していると言えなくもないわけでありませぬ。最低の基準を担保するための技術者資格ですから、建築士という資格が国際的なレベルの建築家の資格につながるということは明らかでありませぬ。私は実は建築家協会の会長をしている間はなかなかこのことは口にしにくかったので、実は今日初めて口にいたします。その憲法論議というのは9条ばかりが問題になりますが、われわれのもっと身近なところで、29条は公益性のためには財産権を制限することができるということになっていませぬ。その公益という観点から、制度が変えられるかもしれないと思っておりますが、これはよほど建築界がまとまって、「このままではだめだ」ということをしない限りは制度が変わりにくいと思っております。そういう意味ではいませぬ、教育をもっと時代に合わせて前に進めていくのも大事でございますが、教育だけが大きい建築学会のターゲットと考えずにいませぬ、もっと広く社会的なあり方全体に対して建築学会の方が議論を進めていただいて、行動につながるようにしていただくことを私は非常に期待していると申し上げて、私の意見を終わらせていただきます。ありがとうございました。

#### 【服部岑生】

どうも、非常に重要な話をご示唆いただきましたが、今のお話は今回時間が充分にも取れませんが、われわれ建築家のいませぬ、倫理性、設計の倫理という問題につながるようなお話ですし、論考をいろいろご提案、ご提出いただいた方の中にはそれに触れられた方もおられますが、村尾さんのように、具体的な基準法と憲法の関係で論じているわけではいませぬが、われわれの中にも関心があつていませぬ問題だと思ひます。また、作品主義ということについてご指摘がございませぬし、ずっと先生方のご意見の中には作品主義というのが否定されてくる、というようなそういう論調が入つていたとおもひますが、そのあたりのことをちょっと積み残しのまま終わらなければいけなような時間になっていませぬ。先ほど、お願いしましたように会場から鈴木先生にご意見を賜りたいと思ひます。

#### 【鈴木成文】

服部さんからこの会に出てくれと言われたので、顔だけは出しますよと言って別にしゃべるとは言わなかつたんですが、でもあの先生方の話を、講演を聞いておりましたら、皆さんのお話にも私とっても同調したわけだ。いい話をしてくださつた。ただどもやっぱりおかしいんじゃないかということも随分ありまして、僕は特に柏原さんと伊東さんの話にはたいへん感心しました。ですけれども、先生方の中にも計画ということをあまり理解してないんじゃないかという発言もあつて、例えば数値や解析ばかり求めていたんじゃないかとか、とんでもないことで、今まで特に計画学というのが建築の方向性とか考え方を提示したということはものすごく大きいと思ひます。ただ、一方で資料集だとかあれを計画学だと勘違いしている人たちはとんでもないことだと思ひます。それで、そういうことを伺つていませぬ、なんかやっぱりこれは私も...、ただ私が発言すると老人のたわごとみたいに言われるので、質問用紙に書こうと思つたら、これ質問用紙とはっきり書いてあつて私は意見なんす。意見及び批評ですから質問用紙には書けないと私は裏にメモしたわけなんですけど、要するに先生方、特に伊東さんの話は感心したんですが、飛躍が多すぎたと思ひます。つまり計画学での三つの要件ということから、すぐそれを機械のように合理的なものを求めている、そんなこと何にも言つてないのに、そういうふうに解釈してしまうわけだ。明快性、客観性、合理性ばかりを求めているのではないかと、とんでもないことだと思ひます。現在では目標が曖昧になっている、だから対話をしながらやっていかなくちゃいませぬ、

これは非常にいいんですけれども、それじゃ目標設定なしでことを始めるんですか？ そんな馬鹿なことはいりえない。目標があるからこそ、対話をしながらその目標を変えていく、とかわからなくなってきているけれども、わからないままに始めることはできない。これが計画学だと思うんですね。話の飛躍というのは非常に耳に心地よく聞こえますので、ついその気になりけるけれども、それはやっぱり疑ってかからなくてはいいないと思いました。

対話をしながらやらなくちゃいけない、ということはこれは本当なんですけれども、おそらく計画学の初期から、だいたい計画というのは目標を常に新しくしていかななくてはいいけませんよ、ということを繰り返し繰り返し言っていたはずだと思うんですね。ですけど、そういうことを、つまり、現在の学生あるいは若い人たちが対話をしなくなったとかあるいはそれができなくなったとかいうことを、計画の教育のせいにする、あるいは建築の教育のせいにする、これは少しね、社会というものと大学の教育というものがどういう立場にあるかということをもう少し考えていただきたいということを思いました。これは伊東さんだけでなく皆さんにですけども。つまり、やっぱりしゃべれなくなったということは大きな全体の社会の流れです。私はその一つの非常に大きな原因の一つが、大学入試にあると思うんです。で、今パネラーの先生たちは、ほとんど大部分が国立大学の先生方ですので、みんなあのセンター試験受ける。センター試験における大学入試ってというのは、問いが出ます。問いが出ると必ず正解がある。五つの中からどれが正解か選ぶ。その選ぶ技術を教えているのが予備校です。ところが、世の中でぶち当たることには問いがあって、あるいは問題があったときに、たった一つの正解があるなんてことはあり得ないんじゃないか？ とくに建築とかデザインの上ではそういうことはあり得ない。そうすると、自分がどういう答えを出すかということを探るのが、考えながら探す、対話しながら探すのが建築のデザインあるいは設計、計画であるべきだと思うんですね。ですから今そういう中学・高校で全部正解探しに陥っているのを、大学に入ってから如何にそれは違うんだよ、ということを一生涯教える。で、対話、しゃべりながら、自分の考えを出しなさいよということ教える。それはですね、今世の中の全体の傾向がそうなっているにもかかわらず、かなり大学における訓練ですね、それができるようになる。私は神戸芸工大ですずっと教えてきましたけれども、神戸芸工大の経験では、それがかなりできるようになるということは実感しました。その結果、コンペやコンクールに入るのがいいかわかりませんが、それでも結構たくさん通るようになってきた。

もう一つ大事なことは、大事なことというよりも社会の欠陥の一つは、やはり多人数教育だと思うんですね。今、国立大学ではまだいいと思うんですけども、一般の私学では80人、100人、150人を教えなくちゃいけない。で、その中で全体の底上げということはあるんですけども、そんなにできるかということですね。やはり私はちょっと乱暴に言えば、上の20%くらい教えればいいんじゃないかと。20%くらいの学生をですね。そうするとあとの50%くらいの学生は何となくついてくる。後の下の20、30%の人たちは単位だけとればいいという人たちがいる。後の5%くらいの人には脱落しても仕方ない、ぐらいいに思っているんですけども、そんなことを言うと教育者としてそんなことを言っているんですか？ ということになると思うんですが、結局はそうなると思うんです。ですからそういう多人数教育をどうするか、っていうのは非常に大きな問題であって、これは今すぐに変えるわけにはいかないと思うんですね。大学経営とか、あるいは社会制度の問題ですので、すぐに本当の研究教育をやるためには入り口を広くして出口を狭めよ。20~30%が卒業できればいいんじゃないか、と、そういうことは今の日本の社会ではできないことなんですね。できないことを言ったところでしょうがないから、多くの者を卒業はさせるけれども、その中で本当に建築家をリードしていくものに20~30%がなっていけばいい。私は少し乱暴かも知れませんが、そんなふうに思っています。

そんなことを言っていますとね、今JABEEやなんかの制度とは非常に対立することになります。と言うのはどういうことかというJABEEいいというのは個人を審査するのではなくて、大学のその教育のシ

STEMだか制度だか、それを審査するっていうことですね。だけど、日本の大学では100人、150人の全体をそういうふうに教育してない、教育できないわけなんですね。ですから、それはホーリスティックな教育とか何とか言っても、本当は評価をするべきものは個人を評価するべきであって、大学の教育制度っていうのはなかなか本当は評価できないものです。

もう一つ言うのは、これは柏原さんがいちばん最初に言っておられた、非常にいいことを言っておられたんですけども、そのグローバリズムとかアメリカからの攻勢っていうのはまさに経済攻勢とか貿易攻勢とか、その他のことでアメリカの体制を押し付けられているわけです。ところが、アジアにはアジアの建築の考え方があって、建築の役割というのものもあるんじゃないかと。そういうことをもう少しきちっと考えて、だけれども、今、国際化という波にはまともに反対はできないから、うまくそれを乗り切るような手段を考えながら、日本は日本なりの教育をうち立てていく、その道を考えればいいということなので、あまり JABEE や UIA にこのまま同調するということは日本を非常に危険な教育の方向に持っていくものじゃないか、まあそんなふうに考えています。

以上なんですが、これは老人のくりごとと思って聞いていただければと思います。

#### 【服部岑生】

抜群のディベート能力の...(不明)という感じがしましたけれども、ありがとうございました。皆さん、一蹴されてしまいました面もありましたけれども、もう一回やり返したいと思っていらっしゃるかもしれませんが、残念ながら時間でございますのでお許してください。それでは、先ほどのお話申し上げましたとおり、5時以前にやめたいということで、まとめをさせていただきます。ただ、稲葉先生から質問(注4)を重村先生などにいただいておりますので、そのことだけ回答させていただきますが、「わが国の建築教育をホーリスティックと称することへの疑問」ということなんですが、これは長年建築学会がホーリスティックということを理念に掲げて、理想に掲げてきたことを表現しているようなので、私もどっからでてきたかわかりませんが、その言葉そのものの意味は「総合的」というような意味ですよ。そのへんでご勘弁いただきたいと思います。実態は充分そういうふうになっていないというのはわかる、理解できることです。それともう一つ、UIA や JABEE の考え方の上に UNESCO の考え方がある点について配慮する必要があるんじゃないか、ということですが、これは UIA や JABEE の考えの上に UNESCO の考え方があるんじゃないか、ということなんですが、その点については JABEE も UIA もですね、教育要件の中には地球環境の問題とか居住環境の問題、あるいは人々の問題、子供の問題、さまざまな観点の教育要件を倫理的な意味でまず教育の条件にしなさいということを入れていまして、恐らく充分であるかどうかわかりませんが、入っているんじゃないかと私は思っていますが、あんまりまじめにやると鈴木先生のような話も出てきますので、その程度のご回答にさせていただきたいと思います。

それから、まとめですが、まずですね、いろんなご意見をいただきましたけれども村尾さんにご指摘いただきましたように、教育界がやっと動き出した、というような言い方をされましたが、そのとおりわれわれは今動き出したわけです。なおかつですね、JABEE、UIA の外的な条件がいろいろ大学にかかっているわけですが、大学というのは非常に誇りのある集団であってですね、そんな他人とやかく言われるのは嫌だ、っていうですね、自分たちで決めたい、っていうこういう気持ちが基本的にある集団ですよ。その辺のことを充分ご理解いただかないと、学会を通して各個別の大学に教育問題がどうだというふうに追及されるとですね、これは皆さん非常に不愉快に思うという条件があると思います。それは基本にご理解いただきたいと思うんですね。なおかつそれで大学がですね、放置しておくことには問題があると思うんですね。今やっと計画系教育ということで、こういう話題を出しているわけですが、今年度から同じ3委員会などの共同ですね、特別研究委員会というのを構成しております。計画系教育の21世紀のあり方についての研究っていうのを3ヵ年やることになっておりまして、それぞれの方向からご参加をお願いして、ご協力をお願いしたいと思っておりますので、大学は誇りがあるということだけじゃな

くて、そんなふうにならぬ方も動き出しておりますので、よろしく村尾さんたちもご協力いただきたいと思ひます。

それからですね、内容的には私伺つていて、鈴木先生ほど年取つてはいいんですけど、それに近いくらい年取つていますんで、20 数年前にですね、「建築設計のあり方をめぐる研究協議会」というのが実はありました。このときにはメンバーは原広司さんと太田利彦さんなどで、若手の教官が何人か出て、討議会を開いたんですが、そのとき実は設計というものを改めて見直さなければいけないというようなことであつて、今日ほど教育体制がどうのとかですね、資格との関係はどうだというような意見には広がつていかなかったんですが、その頃のことを思い出しました。その時の大きな結論はですね、人間とか環境に関わる現象をもう一度新しく見つめなおさないといけないというような結論で、当時の原広司さんの言葉で「事実認識」というのを捉えなおしたらどうか、というようなことだつたと記憶しておりますが、今日伊東さんのお話、要するに、建築の設計の現場の新しい状況というのは、建築というものが取り巻くさまざまな環境が、われわれが知らないものというわけではありませんが、新しく「事実認識」の対象にされるべきだという主張から解いていくと、その... (不明) であると考えることができます。またさまざまな建築家、榊原さんたちからも指摘がありましたけれど、建築生産の中での設計というものがですね、抱えている課題はさまざまあるわけで、そういうものに対する教育の問題をどういふふうにか考えるか、ということで柏原さんを始めさまざまなご意見をいただきました。これも伊東さんののつけの言葉ですけど、リアリティのある設計者、リアリティ意識を持つ建築設計というのは一体なんだろうかという問いかけの一つの答えではないか、というふうにか考えることができます。理念のない建築像、というお話を柏原さんからいただきましたけれど、美しい景観、人間的な環境、さまざまなわれわれが責任を持つべき領域に対してその責任を果たしていないということは、今後の大きな課題で、この点については、倫理の問題あるいは憲法の問題も出ましたけれども、もっともっと議論を深めないといけないんですが、一応話題的に問題が出た、ということ程度で充分時間がございました。

まとめとして充分であるかどうか不安ですが、以上のような協議の結果が出たんじゃないかと思ひます。先生方、何か特別なことはございますでしょうか？ よろしいでしょうか？

それでは、このことであつて閉会にさせていただきます。先生方、どうもありがとうございました。

(拍手)

注1 日本建築学会建築計画委員会・都市計画委員会・農村計画委員会：2002 年度日本建築学会大会（北陸）研究協議会資料 これからの計画系教育はどうあるべきか - 計画系教育の変革のビジョン -、2002 年。以下、「資料」「資料集」「緑色の本」「お手元」はこの資料のことをさす。

注2 2001 年 12 月にアメリカのエネルギー販売最大手会社が倒産した（負債総額 168 億ドル）同社の会計監査を担当していた大手会計事務所アンダーセンが組織的な証拠隠蔽を図つたとして司法妨害の罪で起訴された。

注3 「大改造！！劇的ビフォーアフター」（2002 年 9 月現在、テレビ朝日系で毎日曜日夜 7 時 56 分から放映中）

注4 会場からは長澤 泰（東京大学） 稲葉武司（共立女子大学）の両氏から質問用紙で質問をいただいたが、時間の都合で回答できなかった。なお、両氏の質問内容を参考資料として添付している。

## 研究協議会の写真



左から服部孝生，岡崎甚幸，伊東豊雄，柏原士郎，  
北原理雄，重村 力，羽生修二の各氏



左から服部孝生，岡崎甚幸，伊東豊雄の各氏



左から岡崎甚幸，伊東豊雄，柏原士郎の各氏



左から北原理雄，重村 力，羽生修二の各氏

## 参考資料：質問用紙による会場からの質問（2名）

原則として、文字使いや句読点等は、質問用紙に書かれた原文のままとしている。

長澤 泰（東京大学）

問題点の把握、問題意識、ならびに今後の方向性、目標は各演者の方々にほぼ一致している感じですが、是非どのようにしたら実現できるのか、その具体的方策の御議論をお願い致します。

医療の用語で言い換えれば、「診断」は充分に出来、病気の原因もわかったので、具体的「治療」方針と方法の議論を願いたい。特に「対症療法」と「根治療法」の具体的事例提案をお願い致します。

稲葉武司（共立女子大学）

重村先生へ

我国の建築教育をホリスティックと称することの疑問。

今日の日本の建築教育を外国の関係者（英語国）に説明すると“それはカオスというのが英語の正しい使い方だ”と言われる。（むしろ autistic、自閉的？）

包括的という日本語も語呂が合うようですが、ホリスティックという言葉が独歩きしているような気がします。ホリスティックという言葉は希望値であっても、現実にはカオスであることを認識して、ホリスティックという言葉は止めた（自重？）ほうがよいと思うのですが。

どなたでも

UIA および JABEE の考え方の上に UNESCO の考え方がある点について配慮してみる必要があるのではないか。

世界の文化遺産、人権や難民問題を考える国際機関の UNESCO が地球全体の人工的環境をサステイナブルなものにするため、最も関係ある職能団体として UIA を選んでいるという認識が必要ではありませんか？ WTO や欧米の経済戦略からだけを考え、この点を見落とすと、日本の建築教育・研究のよい点を主張して、ある意味でイニシアティブを取れる機会を失うような気がします。